月の羽根と星の祈り

朔兎小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の羽根と星の祈り

【Ｎコード】
Ｎ６６４７Ｌ

【作者名】
朔兎小鳥

【あらすじ】
ユーノとなのは。不思議な出会いをした二人は、時空管理局でそれぞれの道を歩いていた。それでも、互いが家族のように大切な存在であることは変わらなくて。ずっといっしょにいたいと願う思いは、いつしかその形を変えていく。Ａ'ｓ～Ｓｔｒｉｋｅｒｓの間のお話です。ユーノとなのはの恋愛。基本的に、一話読み切りの短編集です。恋人同士になったあとは、ＳｔＳ後の話も入ります。

星の思い（前書き）

ユーノとなのは。多忙な二人が久しぶりに休みを合わせて出かけようとする。いつもなのはの意見最優先なユーノに、「今回はユーノくんが決めて」とお願いするが……。十六歳くらいの二人。まだまだ初々しく、恋愛モードには突入していません。

星の思い

『ユーノくん。次は、いつがおやすみ？』

電話口から流れてくるのは、音楽のように心地よい声。
仕事で疲れた身体を癒してくれる、最高の音。

「ええと……二週間後かな。それがどうしたの、なのは？」
『えへへ。最近、ずっとお互い忙しくて、二人でゆっくりできなかったでしょ？　だから、よかったら映画とか、遊園地とか、行けたらなあって』
「僕はかまわないけど……。なのは、休みは取れるの？」
『大丈夫！　有休、いっぱい余ってるから』
「有休……。そういえば、僕も使ってないなあ。忙しくて使う暇がない……」

あ、考えて虚しくなってきた。
なのははくすくすと笑う。

『じゃあ、二週間後……火曜日だね。いっしょに遊べるかな？』
「ん、わかった。どこに行こうか。なのはの好きなところでいいよ」
『あ、駄目』

え？
めずらしいきっぱりとした拒絶に、僕はきょとんとする。

「なにが？」
『ユーノくん、いつもそれなんだもん。だから、今回は、ユーノく

んの行きたいところに行くの』
「僕？　僕は、別に……」
『別にじゃ駄目』
「……はい」
『ちゃんと考えてね』

どうしたんだろう？
いきなり。
まあ、いいか。
僕は「うん」と頷いて、電話を切った。

そして火曜日。
待ち合わせ場所の時計塔の下に立っていると、ぱたぱたとなのはの走る音が聞こえる。
「足音だけでわかるの？」とよく聞かれるけど、わかるからしかたない。
なのはも、「うん、わかるよー」って笑ってたし。
……そういうことって、あまりないんだろうか。
よっぽど相性がいいのかな。
それはうれしい。
ふりむいて、僕は絶句した。

「ユーノくん」
「……なのは、髪……」
「うん。今日はおろしてみたの。……変かな？」

不安そうにするなのはがおかしくて、僕はくすりと笑った。
いつもはポニーテールの長い髪をゆったりとたらしていて、もちろん、とてもよく似合っていたから、見とれてしまったんだ。
……とは、恥ずかしくて言えないけど。

「ううん。かわいいよ」
「ありがとう。……それで、ユーノくん、行きたいところ、決まった？」
「うん。水族館」
「了解！　うわあ、楽しみ。水族館か、ひさしぶり」
「嫌いじゃなかった？」
「大好きだよ。イルカ、いるかなあ」

心から喜んでいるのがわかるから、水族館にしてよかったと思った。
好きなところ、と言われても、実はうまく思いつかなくて。
なのはだったらなにが好きだろう、と考えたから。

「いると思うよ。パンフレットに載ってたから」
「あ、ここ。前にね、フェイトちゃんとはやてちゃんと、行きたいなって話、してたの」
「じゃあ、ぬけがけになっちゃうね。別のところにしようか？」
「駄目！」

なんでそんな意地になるんだろう。
別にどこでも、なのはといっしょなら楽しいのにな。
僕の意思を尊重してくれているのだろう。
やさしいなあ。

「はいはい」
「はい、は、一回」
「はい」
「よろしい」

なのははにっこりと笑う。
電話はよくしてるけど、そういえば、直に会うのも久しぶりだな。
なのはも僕も、どんどん忙しくなってきてるから……っていうか、管理局って、基本的に人手不足なんだよな。
だから、なのはみたいに桁外れの魔力を持っている人や、まあ僕みたいに情報探査能力が優れていたりすると、あちこちにひっぱりだこになる。
自分の力が必要とされるのはうれしいけど、地球には「過労死」って言葉があったような……。
まあ、今のところ、なのはも元気そうだから、いいか。
やっぱり直接逢えたほうが、いろいろわかることもある。

「見て見て、ユーノくん。ペンギンだよ！」
「本当だ。かわいいね。あ、3時からイルカショーがあるって。見る？」
「見る！」
「あ、大きいサメ」
「わあ……。……大きい歯だね。これでバリバリ咬むんだよね。痛そう……」
「……痛いだけじゃすまないと思うけど」
「あ、そっか。そうだね……咬まれないように気をつけなくちゃ」
「……ぜひ、気をつけてね」
「うん！」

変なところで気合を入れるなあ。
まあサメくらいなら、なのはならなんとかできそうな気もするけど。
ペンギンを見て、サメを見て、イルカショーを見て、笑顔全開になったなのはにほっとして、僕たちはレストランに移動した。
忙しすぎて使う暇のないお金を使うチャンス、ということで、そ

れなりに高級なお店をセレクトした。味のほうはクロノに確認済みだ。

「おいしい！」

一口食べた後のなのはの感想。

ころころ表情が変わって、おもしろい。

「うん、やわらかいし、ソースも絶品だ」

「うわあ、おいしい……。これもおいしい。涙が出そう」

「それはよかった。がんばって探した甲斐があったよ」

「探したの？」

「だって、なのはが言ったんじゃないか。ちゃんと考えてって」

「……そうだったね。うーん、でも、おいしい。本当においしい。ものすごくおいしい」

「もうわかったってば」

「何度言っても足りないくらいおいしいんだもん。ありがとう、ユーノくん」

「どういたしまして」

食事のあとは、二人で夜道を歩いて、海に行った。

やわらかい波の音。

おだやかな月の光。

なのはは「うわあ」と目を輝かせて、くるくると踊りだす。

「ユーノくん。海だよ、海。海ー！」

「なのは、はしゃぎすぎ」

海なんてそんなめずらしくもないだろうに。

「だって、綺麗なんだもん。昼間の海は見慣れてるけど、夜の海も神秘的で、素敵だね」
「そうだね。あ、中に入っちゃ駄目だよ。風邪ひくから」
「はあい。うふふ、ユーノくん、お母さんみたい」
「……えーと、せめてお父さんにしてくれるかな」
「えへへ。だってー」
「楽しそうだね。なのは」
「楽しいもん。ユーノくんは？　楽しくない？」
「楽しいよ。なのはが笑ってるから」
「……私、笑ってる顔、変？」

とたん、なのはが不安そうな顔になる。
僕はあわてて否定した。

「そういう意味じゃなくて……」
「なんだか、私ばっかり楽しんでるみたい。……ユーノくん、本当に、自分の行きたいところに行った？」
「うん。どうして？」
「だって全部、私が行きたかったところだもん。水族館も、おいしいレストランも、夜の海も、せーんぶ」
「そりゃあ、なのはが喜ぶかなあって思って選んだから……喜んでくれてうれしいんだけど」
「ユーノくんが行きたいところじゃなきゃ、意味ないよ」

ぷう、と頬をふくらませる。
……ぶ。
かわいい。
こういうところは、何年経っても変わらないんだな。
「なのはが笑ってくれるところでないと、意味がないよ？」

「……ユーノくん？」
「なのはが楽しいって思って、笑ってくれたら、僕だってうれしいし、笑えるから。どこでも、そこが僕の行きたい場所になる。なのはと食べる料理はとてもおいしかったし、夜の海だって綺麗だ。僕は十分、行きたいところに行って、したいことしてるんだよ。……っていうのじゃ、駄目？」
「……だめ、じゃないけど……」
「けど？」
「うう……ずるい！」

え、なんで？

「そんなふうに言われたら、私、ユーノくんに甘えちゃうよ。ただでさえ甘えっぱなしなのに！」
「大歓迎だけど？」

僕があっさりうなずくと、なのはが「だめー！」と首を振る。
？？？

「だって、私もユーノくんに甘えてほしいの！」

そして言われた言葉は、予想外すぎる言葉で。

「……は？」
「だから！　……だから、私ばっかり甘えてるのはいやなの。でも、ユーノくんに甘えるの、好きなんだもん。だから、私が甘えるのはやめられないと思うの。でも、たまには、ユーノくんにも甘えてほしいなって……」

えーと……それはつまり……。

「……ぷっ」
「あ、笑った！　ひどい！　私、真面目なのに！」
真っ赤になったなのはが余計に面白くて、僕は笑いをこらえようとするけれど、無駄な努力に終わってしまった。
「あはは！　ま、真面目っていうか……ご、ごめん、でも……あはははは！」
「な、なによーっ！　ユーノくんの意地悪！　笑いすぎだよーっ！」
「だってなのは、甘えてほしいなんて……そもそも、なのは、僕にいつ甘えたの？」
「そんなの、いつもだよ」
いつも？
覚えがないけど。
「話聞いてもらってるし、一緒にご飯食べるのうれしいし。……仕事で失敗しちゃっても、ユーノくんが大丈夫って言ってくれたらがんばれるし……。ユーノくんは、愚痴とか言わないで、がんばってるのに」
「なのはは、僕をずいぶんと買いかぶってるなあ」
「そんなことないよ。ユーノくんはすごいの。いつも、私に元気と勇気をくれるんだよ」
「そんなの、僕だってそうだよ？」
いまさら言わなくても、わかってると思ってた。
だからおかしくて、僕はつい笑ってしまうんだ。
「え？」

「なのはに、いつも力をもらってる。初めて出逢ったときからずっと――甘えてるのは僕のほうだ。なのはは前線で戦っているのに、僕は何の力にもなれない。それなのに、仕事で疲れて、なのはに逢いたくなったり電話したくなる。なのはが逢いにきてくれるとうれしくて、僕に時間を割くよりちゃんと休んだほうがいいって、どうしても言えなくて――」
「言わなくていいよ」

わっ。
いきなり至近距離に迫られて、僕はドキッとしてしまう。
なのはの顔は見慣れているはずなのに、たまにこんなふうになる僕は、どこか心臓の調子でも悪いんだろうか。

「言わなくていい。っていうか、言ったら、怒るよ。ぜーったい、怒るんだから」
「……なのは？」
「我慢なんかしないで」
「……うん」
「私、言ったよ。逢いたくなったら名前を呼ぶねって――我慢なんか、しちゃ駄目だよ！」
「……うん。ごめん」
「私だって逢いたいんだから。なのに、いつも自分ばっかりで、だから……迷惑なんかじゃない。うれしいから――」
「ありがとう。ごめん」
「もう、ごめんはいいよ……」

謝る僕に、なのははくすりと笑った。
僕は頷く。
よかった。
笑った。

「はい」
「……今日は、楽しかった？」
「うん。とても」
「今度は、ユーノくんから誘ってくれる？」
「ぜひ」
「電話も」
「はい」
「私もする」
「待ってるよ」
「逢いにきてね。逢いにいくから」
「そうする」
「……えへへ」
「なのは？」
「約束！」
「うん。約束」

花のように笑って、なのはは手を差し出した。
帰り道、夜道を並んで歩いた。
月の光だけが青白く僕たちを照らしていた。

「すっかり遅くなっちゃったね」
「本当。あ、ユーノくん、月がとっても綺麗だよ」
「なのはは、月が好き？」
「うん。でも、お日様も好きだよ。……ユーノくんは、お月様みたいだけど」
「え？　どうして？」
「……それはないしょ」
「ええ？」

不思議そうな顔をするユーノくんに、私はまた笑った。

そう、ユーノくんはお月さまみたい。
やさしくゆらめいて、ふりかえると、いつもそこにいてくれる。
でも、お月さまと違うのは、手を伸ばせば、手を繋いでくれること。

こんなふうに。
届かない存在なんかじゃなくて、隣にいてくれること。
だから、私はお月さまより、ユーノくんが好き。
初めて逢ったときからずっと――――これからもずっと……。

こうしていられたらいいね。

星の思い（後書き）

なのはシリーズで一番好きな組み合わせがユーなのです。でも本編ではあまり優遇されていないので、自分で書いてみました。
二人が恋を知り思いを積み重ねていく過程をゆっくり書いていければと思います。
とりあえず今回は導入編。まだまだ恋の「こ」の字も出てませんが、はたから見たらデートですよね（笑）

星のゆらめき

今という未来を、きみは夢に見ただろうか。
笑っているとうれしくて。
泣いていると笑ってほしくて。
願うなら、叶うなら、望むなら。
たったひとつだけ。
きみの笑顔が、どうか永遠に。
できるなら僕のそばで、咲いていますように。

「告白されたんだって？」

くるくる、とスパゲティをフォークにまきつけながら、開口一番、冷めた顔でズバッと切り込んできたのは、クロノ・ハラオウン。
時空管理局提督という偉そうな肩書きそのままに、いつでも偉そうな男だ。
親友では決してない、とユーノは世界中の人間に断言したい。つきあいは長いが。
それはクロノも同様で。
どっちかというと知り合い、くらいに留めておきたい、というのが本音だ。
だがしかし……たぶん、友人くらいだ。
いろいろ思うところはあるけれど。
けれど二人の身近の友人には、なぜか「親友」という関係にある

と認知されている。
おかげで関係悪化にさらに拍車がかかった

クロノは前線、ユーノは無限書庫に勤めている。そのため、無限書庫の情報やネットワークを、クロノは普段から頻繁に利用していた。その負荷はすべて無限書庫長であるユーノにのしかかってくる。
仕事だろうがなんだろうが、「クロノ」にこきつかわれるという現実が、ユーノとしては我慢ならなかった。

ではなぜ、今日はいっしょに仲良くごはんなんて食べているのか。
なのはに誘われたからである。
お互いに忙しくて、なのはが「みんなで一緒にごはんを食べよう」と誘ってくれなかったら、今も顔を合わせる事はなかっただろう。お互いに、「こんな男モニタ越しで充分だ」と思っている。
ごはんといっても、管理局の食堂で時間を合わせて昼食をとる、程度のものだが。
ちなみにそのなのはは、今は飲み物を買いに行っている。

なのはが席を立った瞬間にそれか。
ユーノはうんざりとした。そう、仕事以外で逢いたくない理由のひとつがこれなのだ。

「どこから仕入れてくるんだ？　そういう情報」
「聞くまでもないと思うが」
「……エイミィさんか。でも、引退してずいぶん経つのに」
「彼女の情報網を、甘く見てもらっては困る」
「……甘くは見てないけどさ」

どうやら引退しても、子育てが忙しくても、耳年増なところは変わらないらしい。相手がエイミィだと、ユーノは責めることもでき

ない。
彼女にはだれも勝てないと思う。
けれどそういうところだけは変わってほしかった。
切実に。

「相手は司書の後輩か。『ずっと好きでした』か。青春だな」
「からかわないでくれ」
「なのははどうなってるんだ。ほかの女にうつつをぬかしている場合か、情けない」
「うつつなんかぬかしてないよ」

変な言い方はやめてほしい。

「告白されたんだろう？」
「ちゃんと断ったよ。その場で」
「好きな子がいるって、きちんと言ったのか」
「……あのな、何度も言うけど、僕となのははそんな関係じゃない。変なかんぐりしないでくれ」

ユーノの言葉に、クロノは深いため息をつく。
まるでなにもわかってないと言わんばかりだ。
なんでそんなため息をつかれなくちゃいけないんだと、ユーノはなんだか苛々してくる。

「じゃあ、なんて言って断ったんだ？」
「『仕事が忙しくて、そんな余裕はありません』」
「それじゃ納得しないだろう。相手は部下だろ？」
「……なんでそこまで知ってるんだよ」
「俺に聞くな」

夫にも機密事項な情報網なわけか。
ユーノはやれやれ、と息を吐く。ごまかせそうにない。
「『きみをそういう対象で見ることはできない』」
「やっぱり、高町教導官とつきあっていらっしゃるんですか？って聞かれただろう」
「……エイミイさんってさ」

だから、なんでそこまで知ってる。
ユーノは一瞬、本気で管理局が盗聴されているのではと考えた。
「だから、俺にはわからん。で、訊かれたのか？」
「……訊かれた」

それはそうだろう、と、クロノは頷く。
暇を見つければお互いに逢いに行き、重なった休みには映画を見たり食事をしたり、足音だけで相手が判別できるという。
恋人でなくてなんだというのだ。
と、クロノは物申したいが、黙っていた。
「違うって説明したけど、わかってもらえなかった」

当たり前だろう。
心からそう突っ込みたいが、やはり黙る。
「でも、あきらめてくれたみたいだから、よかったよ」
「……あ、そう」

いや、それであきらめてくれるわけないと思う。
そう思ったがクロノはやはり以下略。

そんな曖昧な断り方であきらめられるわけがない。やさしすぎるのも困りものだ。
ためいきもつきたくなるというものだ。
どうして二人そろってここまで鈍感なんだ。
片方だけならともかく、二人そろってだなんて、こうしてあらためて考えてみると、仲間内が「ほっといたら百万光年経ってもあのまんまよ！」と力説する理由がわかってしまうではないか。
恋愛に関して、たいしたアドバイスとか忠告とか、できる身分ではないのだが――――

「ユーノ、訊きたいんだが、きみにとって、なのはなんなんだ？」

ユーノはきょとんとする。
なんでいまさら、そんな当たり前の質問を、と思いつつ、こたえる。

「友達。恩人。……あとは、幼なじみ、かな？」
「それだけか？」
「ほかにもある？　ああ、一応同僚だね。部署は違うけど」
「ほかには？」
「ほか……えーと、そうだな。あ、なのはに魔法を教えたのは僕だから、一応先生と生徒ってことになるのかな。でも、なのはは、僕が教えなくても上手になったと思うけど。最初から、彼女の才能はスペシャルだった」
「ほかには？」
「ほか？　なにかあるか？」
「なにもないのか？」
「なくちゃいけないの？」
「いけなくはない。が……きみはいくつだ？」
「十六歳、だね。今年で」

十六歳……十六歳か。
なのはに初めて出会ってから、もう十年以上になるんだなあ。
月日が流れるのは早い。
早いわりに、思い出はぎっしりつめこまれてるけど。

「なのはは？」
「十六歳だよ。同い年なんだから、当たり前だろ」
「最近――――昔から人気はあったが、特に、という話も知っているか？」

ユーノは動揺もせずにこっくりと頷く。
周知の事実だ。

「知ってるよ。たくさん告白されてるみたいだね。のきなみ断ってるけど」
「焦ったりしないのか」
「……は？」
「今は断っていても、いつかその気になるかもしれないだろう。それをほうっておいて、ただ見ているだけでいいのか、と訊いている」

真剣なクロノの顔に、ユーノは「うーん」と頬をかいた。
いや、べつに、隠すことではない。ないが。
説明して、わかってもらえるかどうかは微妙だ。

「別に、なのはの好きにすればいいことだろう。僕がどうこういえる問題じゃないよ」
「淡白だな」
「……あのさ、別にきみに言うことじゃないんだけど。僕はなのはのこと、大切な友人だと思ってる。もちろん、とても好きだよ。好

きな人や、まして恋人ができたらさびしいと思う。だけど、僕にとってなのはは、一番の恩人でもあるんだ。だから誰よりもしあわせになってほしい。その助けにこそなれ、邪魔するつもりは毛頭ないよ」

本心からの言葉なのに、クロノは感銘を受けなかったらしい。

「あ、そう」と呆れた感じだ。

何年経ってもムカつく男である。

こっちは真剣に話をしているのに。

「助け、ね」

「なんだよ」

「別に。きみがそう思っているならいいさ」

「……意味ありげだな」

「きみとなのは、共通の友人として、ひとつ忠告しておくよ。きみの、そのとんでもなくおひとよしで鈍感なところは一応長所と呼べなくもないかもしれないけど、よく短所にもなるってことをね」

「……ドウモアリガトウ」

「どういたしまして」

そしてクロノはにっこりと微笑んだ。

このくそ野郎。

――――ユーノにとって、なのはは。

幼なじみで。

友達で。

友人で……。

独り、傷ついてもがいていたユーノには、きみはやさしすぎる存在で。
あの日、あのとき、その手を求めてしまったことを。
ユーノは何度も思い出し、そして後悔する。
ユーノはなのはの運命を確かに変えてしまって、それを、なのは自身は後悔などしていないと知っているけど。
それでも、ユーノがその光にすがりつかなければ、きっとなのはは変わらずに、自分のいたやさしい世界で生きていけたのだと思うと。
やさしい人たちに囲まれて。
たくさんの痛みを伴わぬまま。
――その後悔が、ずっと。

「ユーノくん」

――だから、なによりも、だれよりも。
きみが幸福でありますように。
願っているから。
隣にいるのが僕じゃなくても、そんなことは本当に、どうでもいいんだ。
心から。

「お待たせ、ユーノくん。……あれ、クロノくんは？」
「先に行った。用事があるんだって」

「ふうん。残念」

なのはは持ってきた飲み物をテーブルにおいて、すとんとユーノの向かいに座った。

「なのは、最近調子はどう？」

「絶好調！　六課のメンバーもね、みんなメキメキ腕を上げてるんだよ」

「そう、よかったね」

「うん！　……ユーノくんは……」

「僕？　僕は変わらず、無限書庫に閉じこもってるよ。ああ、でも、今度、貴重な遺跡の発掘に参加させてもらうことになったんだ。それは楽しみかな」

「え、あ、そ、そうなんだ。あ、あはははは！」

「……なのは？」

なんだかなのはの様子がおかしいような気がして、ユーノはぴたっと額に手を当ててみる。

熱はなし。いや、ちょっと熱いか？

「……ユーノくん？」

「風邪じゃないみたいだけど……どうしたの？　なんだか変だよ？」

「や、やだなあ。変じゃないよ、全然。……あのね、ユーノくん」

「うん？」

「……目玉焼きには、やっぱりおしょうゆだよね」

「……そうだね？」

といいつつ、かけてるのはソースなんだけど。

なのは、どうしたんだろう？

結局食事が終わるまで、なのはは挙動不審のままだった。

なにかユーノに聞きたいことがあるような、そうではないような。
うーん？
まあ、元気そうだから、いいか。
触れてほしくないみたいだし。

ユーノと別れたあと、なのはは深くため息をついた。
そんななのはの肩を、フェイトがぽん、と軽く叩く。

「……どうだった？　なのは」
「訊けなかった……」
「そ、そう……。だ、大丈夫？」
「うん……」

全然大丈夫ではなさそうな親友に、フェイトはどうすることもできなかった。

「……きっと断ったよ。ね？」
「わかんない……だって、すごく可愛い子だったもの」
「なのはだって可愛いよ」
「可愛くないよー！　魔法でユーノくんの結界ぶちやぶったことだってあるもん！　絶対可愛くないもん！」
「なのは……」
「……私って、鈍感だったんだね……フェイトちゃん」
「え……」

そのことにすら気づいてなかったのか、と、フェイトは返答に詰まる。

「こんなことになるまで、自分の気持ちに気づかないなんて……」

真っ赤になってうつむいたなのはに、フェイトはくすりと笑った。

こんな顔ははじめて見る。

けれど――けれど、フェイトたちにはわかっていたことだった。

いつか、こんな日が来るとわかっていたから、むしろユーノに告白したその少女に、拍手喝采を送りたい気分だったのである。

ひそかに動き出したこの恋を、ユーノはまだ知らない。

星のゆらめき（後書き）

ユーノ視点の話なので、なのはの心の機微はいまいちわからないまますね。続いてすみません……。次のお話はなのはメインになる予定です。クロノとユーノは、お互いの能力は認め合っていますけど、本気で嫌いあっていればいいと思うわけです。そういう関係ってよくないですか？＾＾

星のとまどい（前書き）

ユーノへの思いを唐突に自覚したなのは。胸が痛い。苦しい。こんな感情は知らない。ひとりでは抱えきれずに、相談したのは。なのは視点。

星のとまどい

「……ユーノ、くん」

拳を握りしめる。
かすれる声で名前を呼ぶだけで、こんなにも胸が苦しくなる。
知らなかった。
知りたくなかった。
こんなまっくろな感情を、胸の内にとどめなければならないのなら。
受け入れなければならないのなら。
大切な、大好きな、幼なじみのままでいたかった。

「……好きです」

涙が出そうになるのを、必死にこらえる。
どうして？
泣きたくなるようなことなんてないのに。

「好きです。……スクライア司書長が……好きです……」

ぽろぽろと綺麗な涙をこぼして泣いている知らない女の人。
苦しそうに顔を歪ませるユーノくん。
これ以上二人を見ていたくなくて、私は背を向けて走り出す。

気づかれないように息をひそめて、足音をたてないように――――
そう、私は、逃げたのだと思う。

ユーノくん。
ユーノくん。
ユーノくん……。
ふりはらいたいにのに、映像が焼きついてはなれない。
わきあがってくるこの気持ちは嫉妬？
羨望？
焦燥？
欲望？
わからない、醜くて汚いもの。
なのに大切なもの。
捨てられないもの。
わからない。
ただ、涙が止まらない。
あなたにそばにいてほしい。
どうして逃げ出したの？
どうしてここにいるの？
わからない。
わからないままでいい。
ううん、ちがう。
本当はわかってる。
本当は、ずっと前からわかってた。
わかりたくなかったから、わかろうとしなかっただけ。
認めて、今までの全てが変わってしまうのが、終わってしまうのがおそろしいだけ。

――――ユーノくん。
あなたに、とても逢いたくて、苦しいです。

あなたが、とても好きで、苦しいです。
———好きです。
たとえ「今」が壊れてしまっても。
気づいてしまったこの気持ちを、私はどこまで隠せるだろう……？

「ユーノくん、おはよう」
「おはよう、なのは」

声をかけると、彼はいつものように笑ってくれた。
そう、彼は変わらないのに、私だけ変わってしまった。
なんてことだろう。
それでもなるべく今までどおりに、と、つとめてみせる。

「今日も遅くまで仕事？」
「うん。今日中に片付けたい案件がいくつかあるから。なのはは？」
「私は、今日は報告と事務だけなの。だから、終わったら……ユーノくんのところに行ってもいいかな。もちろん手伝うから」
「仕事はいいけど……。……なのは、なにかあったの？」

ぎく。
あいかわらず、ユーノくんは鋭い。
でも、気づかれるわけにはいかない。
私はあわてて笑う。
「う、ううん。特になにも……ないけど」

あああああ……とはいえ、うそは下手な私。
声がうわずってしまった。
バレてるかなあ。
バレちゃってるかなあ。
ユーノくんの手が、ぽん、と、頭の上に置かれる。
……やさしい手。
この手に今まで、どれくらい、救われてきたんだろう。

「本当になにもない？」
「……なんでそんなに疑うの？」
「疑ってしまうような顔、してるからだよ」
「……」

ごもっとも。
反論できない。
黙ってしまった私に、ユーノくんはくすりと笑う。

「無理には聞かないけど、……あんまり無茶したら駄目だよ。なのはは、がんばりすぎるのが悪い癖」
「……そんなことないよ」
「そんなことあるよ」
「ユーノくんだって、いつも寝不足って顔してるくせに」
「僕はデスクワークが主だから、平気」
「過労死って言葉、知ってる？　一日の労働時間は基本———」
「自分の身体は自分が一番わかってるよ。……なのは、話そらしただろう」

う、またしても、ぎく。
もう、なんでこうなっちゃうのかなあ。

やっぱりつきあいが長いから？
私も、ユーノくんの体調とか、顔を見ればだいたいわかっちゃうし。
でも、ユーノくんは、無理に問いただそうとはしない。
淡い緑の眸に見つめられると、じんわりと心があたたかくなる。
やさしい。
やさしくて、やさしくて、愛しい。
……だからどうしても、こぼれて。

「……ユーノくん。――――」
「え？　なに？」

……だめだ。
やっぱり言えない。

「……なんでもない。それじゃあ、夕方ね」
「？　うん……」

不思議そうに眉をひそめているユーノくんに笑って、私は走り去った。
逃げた、ともいう。
ああ、私、きっと今、とてもいやな顔をしている。
やさしさがうれしくて愛しくて、苦しい。
そんなふうに笑わないで。
うそ、笑って。
私にだけ、ずっと、笑っていて。
甘えたい。
甘やかしてほしい。
もっと、もっと――――私だけ。
気持ちを口に出す勇気もないくせに。

あの告白がどうなったのか、それさえも聞けない。
だって怖い。
今の関係が壊れてしまうのが。
十年以上、大切に大切にしてきた関係を壊してしまうのが。
だけど壊してしまいたい。
伝えてしまいたい。
思いがあふれて止まらないから。

だけど拒まれたら？
この気持ちがただの一方通行でしかなかったら？
ユーノくんはだれにでもやさしいから、やさしくされたからって、簡単に勘違いもできない。
そうしたら――――壊れた気持ちだけを抱えて、私はどうすればいいの？

「ただいま……」
「おめでと――――っ！」
ぱん、ぱぱんと、大量のクラッカーに出迎えられて、眼と耳がパチパチする。
……へ？
ええと、ルームメイトのフェイトちゃんは、いて当たり前、だけど……。
「はやてちゃん、ヴィータちゃん……シグナムさんにシャマルさんまで……え、えええ？　エイミィさんにアルフさんも、子どもはいいんですか？」

「いいの、いいの。クロノくんに任せてきたから！　それよりほら、主役はここに座る！」
「え？」

主役？
今日は誕生日じゃないけど……。っていうか、クロノくん、確か徹夜明けでへとへとのはず……エイミィさん、容赦ない。
じゃなくて、主役ってなに？
フェイトちゃんが困ったように笑う。

「ごめんね、なのは。私が口を滑らせたばかりに……。一応止めたんだけど」

くちをすべらせた？
……えーっと、まさか……。
確かに昨日、フェイトちゃんにユーノくんのことを相談したけど――まさか。

「祝！　なのはちゃん自覚記念パーティだよー！」
「長かったなあ……もう十年以上かあ……クロノくんとエイミィさんも長かったけど、二人の比じゃなかったってことやな」
「あはは、私の話はいいんだよ、はやてちゃん」

……やっぱり……。
じ、自覚記念って……は、恥ずかしいよう。
そんなしみじみ頷かれても。
……あれ？
でも、驚いてるふうじゃない。むしろ、なんていうか、「いまさら」みたいな雰囲気が。
ってことは、あれ、もしかして……。

「も、もしかしてみんな、私の気持ち、知ってたの？」
『当然』

シグナムさんまで口をそろえなくても……。
え、えええ？
ダブルショックで頭がこんがらがる。
ヴィータちゃんは「はあ」とためいきをついて、真っ赤になっている私の肩をぽん、と叩いた。

「お前以外は、みんな気づいてたぞ。っていうか、気づかなかったお前がすごすぎだ」
「え、えええ？　そうなの？」

そ、そんなにわかりやすかったのかな……わたし……。

「だいたい、前から言ってただろ。そのたびにそんなことないって否定してたのは誰だよ」

そういえば……いつも、「ユーノくんとはどうなってるの？」とか、「どこまでいった？」とか聞かれていたような……。

「あれって、『ケンカしないで仲良くやってる？』って意味じゃなかったの？」
「……」
「……」

え、あれ？
なんでみんな無言なの？
あ、あああ、呆れてる！

「なのはちゃんはこれだからなあ……十年もかかるはずやわ……」
「は、はやてちゃん！」
「そのユーノくんに告白した女の子に感謝やわ。こんなことでもなければ、一生きづかへんかったやろ。な、シグナム、シャマル」
「そうですね、主はやて。私も常々、二人のこの鈍臭さはいかがなものかと思案しておりましたので」
「シ、シグナムさん……鈍くさいって……」
「まあまあ、いいじゃない、シグナム。二人には二人のペースがあるんだから」
「シャマルさん……」
「幼なじみとしての信頼が愛に変わった瞬間！　興味あるわよねえ、ね、なのはちゃん？」

え？
シャ、シャマルさん、顔が怖い……。
いつのまにか、私はまわりをみんなに囲まれて逃げられなくなっていた。
ひ、ひえええ！

「ふうん。で、ヤキモチやいちゃったんやな」
「う、うん……」
「でも、ユーノくんやったら、前々から告白はされてたで？」
「え、うそ！」
「うそやあらへんよ。なあ」
「私も一度、遭遇したことがあります。若干十六歳で情報を司る無限書庫の司書長ですし、考古学にも秀でております。加えて優秀な

結界魔道師ともなれば、能力的にも将来的にも、ぜひものにしたい物件、ということでしょう」

とは、シグナムさん。

も、ものにしたい物件……。

「頭の回転も速いしな。あたしもたまに情報もらいに行くんだけど、こっちの言いたいこととかしてほしいことをすぐにわかってくれて、求めた以上の答えを出してくれんだ。無限書庫じゃもったいねーよ。六課の作戦参謀にするべきだ」

とは、ヴィータちゃん。

「あ、それええな。誘ってみよか」

「だ、だめ！」

「冗談やって。まあ、本気にしてもええけどな。ユーノくんには、前線で戦うより、自分の好きなこと、好きなだけしててほしいんやろ、なのはちゃん」

うっ。

私はまた真っ赤になる。

そ、そりゃあ、また、ユーノくんと同じ場所で戦えたらうれしいけど……。

それほど心強いことはないけど……でも……。

やっぱりユーノくんは、根が学者さんっていうか、研究者さっていうか。遺跡発掘のお話とか、歴史探究とか、そういうことしてるときが一番きらきらしてるから。

……その邪魔をしたくないって思うのは———友達としては、おかしいのかな。

「愛やなあ……。あれ、なんの話やったっけ。そうそう、ユーノくんがもてるっちゅう話やな」
「それですけど、ほら、無限書庫って、今じゃ情報管理システムの要じゃないですか。いろんな人が出入りするので、ユーノくんって結構有名人なんですよ。一見すると女の子みたいに綺麗な容姿も、注目集めてるみたいです」

とは、シャマルさん。
そ、そうなんだ……。
確かに、ユーノくんって、ふだんぽやーっとしてるけど、あらためて見ると整った顔立ちをしているような……。
……し、知らなかった……。
ユーノくんって、そんなにもてるんだ……！
昔からいっしょにいるから、顔がどうとか考えたことなかった！

「み、みんな……煽りすぎだよ。なのはが真っ青になってるから……」

そうだよねえ。
ユーノくんが、もてないわけないよね。
今まで全然考えなかったけど、だって、ユーノくんってすごくやさしいもの。それがあたりまえっていうか。……そんなわけないよね。
フェイトちゃんの声が遠くに聞こえる。
つまり、ユーノくんを好きな人はたくさんいるんだ。
……やっぱり、ただの幼なじみでいたほうがいいのかなあ……。

「……だめ。思考の迷路に入ってる。ぜんぜんこっち見ない。聞いてないし」
「おもしれーな。こんななのは、初めて見た」

「恋する女の子ですねえ。かわいいわ、なのはちゃん」
「しかし、普通気づかへんもんやろか。そんなユーノにとっての特別は、なのはちゃんだけなんやって」
「見てればわかります」
「本人にはわからんもんなんやなあ。わかったら、不安になんかならへんもんな」
「なのはちゃんの場合、小さいころから何年もかけて築いたものがあるからね。それを一回壊さなきゃいけないから……やっぱり怖いんじゃない？」
「でも、一歩前進したことは確かや！　……あとはユーノなんやけど……」
「ユーノくんなら大丈夫って、クロノくんが言ってたよ。もう、なのはのことしか考えてないってさ」
「なんだ。やっぱりラブラブなのか」
「ラブラブですね」
「ラブラブやー」

もちろん、なのはの耳には入っていない。
考えてしまうのはやっぱりあの告白の返事で、やっぱり、本当のユーノの気持ちだった。
最後まで聞いておけばよかった。……いまさら遅いけど。
窓の外には月が浮かんでいる。
思い出して苦しくなって、なのははふいと眼を背けた。

星のとまどい（後書き）

恋する女の子大爆発。な、お話。ユーノはちなみにとっても鈍感なので、なのはの気持ちにはちっとも気づいておりません。ベタですねーあはは。次は、ユーノとなのはががっつり絡む予定です。

月と星の距離（前書き）

いきなりなのはから避けられてしまうユーノ。理由もわからず戸惑うが、忙しい毎日が過ぎていく中、ぼんやりとただ、「逢いたい」と思う。そして、愛しい面影を夢見る。

月と星の距離

走り出してしまったら、ぶつかって、壊れてしまうだけ。
わかっているのに、どうして止まらないんだろう――――

「あ、なの――――は？」

ユーノが名前を呼び終わる前に、なのはは風のようにユーノの目の前から姿を消していた。
あとには木枯らしのように冷たく頬を撫でる空気と、ぽつんと取り残されて首をかしげるユーノだけが残った。

（……最近、なのはに避けられている気がするのは……どう考えても気のせいじゃないんだろうな。今なんか、あからさまだったし）

眼が合うとびくりと怯えたような表情を一瞬見せた後、くるりと背を向けていってしまう。あんな顔をされてしまったら追いかけられない。
ユーノはぽりぽりと頬をかいた。

（なにか、気づかないうちにしちゃったのかなあ……心当たりはないし）

何かを悩んでいるなら力になりたい。

けれど、ユーノでは力になれなくて、ユーノには関わってほしくないなら、できるならそっとしておいてあげたい、というのが、一応理性が導き出した結論である。
が、しかし。

『ユーノくん』

いつものなのはなら、ユーノを見かけるとぱっと笑顔になって、名前を呼んで、かけよってきてくれる。
どんなに忙しくても、逢えない時間が続いても、それだけで本当に……本当に癒されていたから。
それがなくなる、となると――

（……けっこう、キツい、かも）

自問自答して、情けないため息をついてしまう。

（……我慢できるかなあ、僕）

いやいや、なのはのためだ、と、ユーノは思いなおす。我慢できるかできないか、ではない、しなくてはいけないのだ。
――なるべく早く、なのはの悩みが解決することを祈ろう。
いまだなのはが消え去った方向を眺めながら、ユーノはしみじみとそんなことを思った。

それから、ユーノもなのはも仕事が詰まって、さらに逢えない日々が続いた。

ユーノから逢いにいくことは自重していたし、そもそもそんな時間も取れなかった。また、なのはのほうから逢いに来ることもなかった。

よってばったり顔を合わせることも、脱兎のごとく走り去るなのはを見かけることさえなくなって――簡単に二週間が経過した。

努力をしなければ、逢おうと思わなければ。

こんなに簡単に逢えなくなってしまうと、実感する。……このまま、もう二度と逢えなくなるのではないか。そんなばかばかしい不安に駆られる。

（……逢いたいなあ）

無限書庫の宙をふわふわ漂って資料の検索に没頭しながら――それもものすごい処理速度で――ユーノはぼんやりとそんなことを思った。

なのはに逢いたい。

逢いたくなった。

どうしようもなく、今、逢いたい。

どうしてだろう？

同じくらい忙しくて逢えないのは、フェイトやはやても同じ。

なのはは二人と比べて、もちろん特別だけれど。彼女は、自分にとって、世界を変えた人だから。

もちろん、とても好きだけれど。

他の誰にも代えられない、大切な人だけれど――

――けれど……？

（けれどって……なんだろう……？）

こんなにも、こんなにも、きみだけに逢いたいのはどうしてなん

だろう？

「……なのは」

誰にも聞こえないくらい小さな声で、しかしはっきりと、名前を呼ぶ。

それだけでは届かないことを、僕らはもう知っている。

わがままを言ってもいいと、彼女は言った。

がまんなんてしないで。

逢いたくなったら、逢いにいくから。

名前を呼んで。

逢いにきてね。

約束だよ――――

記憶の中のたくさんの笑顔を思い出しながら、ユーノはまどろむ。

目を閉じて。

きみの夢を見たい。

夢でいいから。

幻でいいから。

逢いたい。

ユーノは夢を見ていた。

なのはが笑っている夢だった。

泣いている夢だった。

ああ、よかった、と、ユーノは安堵する。

その笑顔に、ずっとずっと逢いたかったから。

逃げないでほほえみかけてくれることがうれしかった。
だけど、どうして泣くんだろう、と、不思議になる。
笑っているのに、泣いている？

———ああ、なのは、泣かないで。

「……」

なのはが何を言っているのか聞き取れなくて、ユーノはなのはをひきよせて、腕の中に閉じこめる。
なのはの顔が吐息が聞こえるくらいまで近くにあった。
あれ？
どうしてだろう、と、ユーノは追いつかない頭でぼんやりと考える。
けれどすぐに、考えることを放棄する。
そんなことはどうでもよかった。
ただうれしかった。
今日は、なのはは逃げないからだ。
なのはの顔を、こんなにじっくり見るのは久しぶりだった。
せっかくなので、じっくりと堪能することにしよう。

さらさらの栗色の髪。
黒く透明な瞳。
薄桃色に染まった頬。
さくらんぼみたいにつるつるの唇。
……甘そう。
そんなことを考えた、と、脳で思考がまとまったとき、ユーノはそのふくよかな唇を、ぺろりと舐めていた。

（……ああ、やっぱり、……甘い）

なのはの頬が、唇の赤に負けないくらいに、どんどん赤くなっていく。
林檎みたいだな、と、思う。
かわいい。
でも、どうして赤くなるんだろう？
恥ずかしいのかな。
なにが？
もぞもぞと逃げようとするなのはを、ぎゅっと強く抱きしめて逃がさないようにする。
潤んだ瞳とか、真っ赤な頬とか、全部が甘くて、おいしそうで。
ユーノはもっと味わいたくなって、ぺろぺろと舐めたり、少し噛みついたりする。
心地よい甘さが身体を伝って、頭がしびれていく。
気持ちいい、ような、ずっとこうしていたい、ような。
不思議な感覚だった。
酒に酔ったときと少し似ている。くらべものにはならないけれど。
夢なのに妙にリアルで、ああ、これが現実なら――――
（……あ、れ？　夢……だよな……？）
そこでぱっちりと、なのはと眼が合う。
「……ユーノ……くん」
かすれた声で、小さく名前を呼ばれる。
――――！
そうして、一気に眼が覚めた。

（夢――――じゃない！）

びきびきびき、と、音を立てて固まったユーノの腕の中で、なのはが大きく潤んだ瞳で、じっとユーノの言葉を待っていた。

逢いたくて、逢いたくなくて、でもやっぱり逢いたくて。

なのはは自分の気持ちをもてあましていた。

普通に接すればいいのに、今まできちんとできていたはずのことが、どうしてもできない。

ユーノと眼が合うだけで頭が真っ白になってしまう。

やさしい胸に飛びつきたくなる。

見えないところまで逃げたくなる。

結局、いつも後者を選んでしまうのだけれど。

そんな自分が情けなくて恥ずかしくて、消えてしまいたくなる。

ユーノの笑顔がうれしくて、苦しかった。

酷い態度ばかり取っているのに、眼が合えば、いつも笑顔を向けてくれた。

胸が、痛くなった。

ずっしりと重くなって、ひびが割れて、砕けてしまいそうになる。

伝えたら、この気持ちを伝えたら。

少しは楽になるかもしれない。

けれどそれ以上の恐怖がなのはを襲う。

出逢ったときから今まで、築きあげてきたものすべてが、どんな形に決着がついても、壊れてしまう気がした。

いっしょにいたい。

そばにいたい。

ずっと、隣にいたい。

一番近くで、あなたの笑顔を見ていたい。
どんな形でもいいから。
いくら考えても、出てくる答えはこんなものばかりだった。
情けなくて、ばかばかしくて、それでもどうしようもなくて。
自分らしくないと思う。
早くもとに戻らなければ、いつか仕事にも支障が出てきてしまいそうだ。
そんなことは許されない。
だから、逢えばどうしてもゆらいでしまう心を閉じてしまおうと思った。
それからなのはは仕事に没頭した。するとあっけなく、心は平穏を取り戻した。
ユーノがいない日々はなんて穏やかなのだろう。
こんな簡単に笑顔になれる。ゆらぎも惑いもなく。――――どうしようもない虚しさとともに。
逢わないことと、逢えないことは、違うのだと。
ユーノが逢いに来なければ、なのはが逢いにいかなければ、逢えなくなる。
そんな事実にうちのめされる。
そしてふと思い出せば、逢いたいという気持ちがあふれだして。
逢いたくて。
逢いたくて。
逢いたくて。

「なのは」

あたたかい手が。
やわらかい声が。
やさしい笑顔が。
やっぱり、どうしても、どうしても、好きだから。

ひとりじめしたい、なんて、言わないから。
一番じゃなくてもいいから。
好きでいるだけでいいから。
あなたと共にあることを、どうか許してください。

「なのはは、僕の大切な人だよ」
「私、ユーノくんが大好き」

あたりまえのように伝えて、伝えられた言葉は。
もう、すべての色を変えてしまった。
子どものままで、純粋で、綺麗で、だれも傷つけない。
そんな心のままで、いられたらよかった。
種は芽吹いて、いつか花を咲かせる。

自分勝手でごめんなさい。
わがままでごめんなさい。
それでも笑ってくれるなら———

ユーノの部屋の扉の前で、なのはは「ごくん」と喉を鳴らせた。
幾度となく訪れた部屋のはずなのに、まるで異世界につながっているような感覚に陥る。
無限書庫の人の話だと、最近働きづめだったので、今日は午後から部屋で休んでいるそうだ。
空はもう夕焼けに染まっている。仮眠を取っていたとしても、そろそろ起きてもいい頃合いではないだろうか。

(……ええと、まずは、ずっと避けていてごめんなさい、って謝って……それから、これからも仲良しの友達でいてくださいってお願いして……め、迷惑って言われたらどうしよう……)

あのやさしいユーノがそんなことを言うはずがないとわかっていても、乙女心はゆれるのである。
とにかく話をしなければ始まらない。なのはは「よし」と気合を入れて、インターフォンを押した。
しかし、返事はない。
もう一度。以下略。
もう一度押すと、ぷしゅっと扉が開く。

（……鍵、開いてる）

部屋の中は薄暗かったが、なのははすぐにユーノを見つけることができた。
ベッドの上で、毛布もかけずにすやすやと寝息を立てている。服も仕事着のままで、部屋に着いてすぐベッドに倒れこんだ、という感じだ。
よほど疲れていたのだろう。
しかし。

（……気合入れて損しちゃった。でも、ちょっとほっとしたけど）

しかも寝顔なら、安心して見つめることができる。
最近は避けてばかりだったから、まともに見ていなかったのだ。
しかし、好きな男の人の顔を見たくない女の子はいない。

（ふふ。フェレットのときの面影、あるかも）

きゅうって鳴きそう。
つん、と、頬を撫でる。
ユーノはぴくりと眉を動かしたが、また規則的な寝息に戻る。
昔とちっとも変わらない。

変わったものはたくさんある。なのはの気持ちもそのひとつ。
けれどこうして、変わらないものもある。
それは、とても、うれしい。
ねえ、ユーノくん。
あれから十一年経ったんだね。
長かったかな。
あっというまだったかな？
ずっといっしょにいたね。
いっしょにいるのがあたりまえみたいに思ってた。
これからも、あたりまえみたいに信じてた。
だけど、ちがうってわかったんだよ。
ユーノくん。
でもね、私は、これからもいっしょにいたいな。
ずっとずうっと、こんなふうに、いっしょにいたい――――

「……大好き」

そして、見慣れた翡翠の瞳と眼が合って。
腕をからみとられた、と、自覚する暇もなかった。

一瞬で、世界はその色を変えた。

月と星の距離（後書き）

ラブな話っぽくなってきたでしょうか＾＾ちなみに、全体のタイトルでも、今回のタイトルでも、月と星が入ってますが、一応説明いたしますと、月＝ユーノで星＝なのはのことです。月の羽根＝ユーノの手、星の祈り＝なのはの思い。なのはの思いを包み込むユーノの手のひら。みたいなイメージでつけました。おおう、恥ずかしいですね（笑）なのはは避けたり逢いに行ったり忙しくて、ユーノはふりまわされますが、女の子にふりまわされる男の子っていいですよね！なのはとしては、ふりまわしてる自覚ないんですけど。ラストあんなことになってるし。酷い男です、ユーノ（笑）

ホシイロセカイ（前書き）

寝ぼけて、夢の中でキスをして、起きたら本人がいた。――一気に眼が覚める。真っ青になったユーノは混乱して、ただ謝るばかりで。謝ることしかできなくて。なのはがなにを思っているかなんて、考える余裕もなかった。

真っ白な頭で、ユーノは必死に考えた。
状況確認。
ベッド。
押し倒し（に近い）。
無理矢理キス。
そして涙眼のなのは（決定的）。

「――――っ！　ごめん！」
「……」

真っ青になってあわててなのはからとびのくと、背中と頭を思い切り壁にぶつける。

（い、痛い……）

しかし、痛がっている場合ではない。
おかげで頭がすっきりしてきたユーノは、ようやく自分の行動を省みることができた。

（ぼ、僕、今……な、なにを……）

なのはに、なにをした？
なにをしてた？
ちらりとなのはを見れば、ぴくりとも動かない。

（わあああ、かたまってる！）

ユーノはあせって、無意味に両手をばたつかせながら必死に謝る。
とにかく、謝らなければいけないと思った。
なのはを怖がらせてしまった。
傷つけてしまった。
無意識課の行動とはいえ、いやだからこそ、なんてことをしてしまったのだろうと思った。

「ごめん！　ごめん！　ごめん！　あの……大丈夫？　なのは……ごめん、僕が、こんなこと言える立場じゃないのはわかってるんだけど……。あ、謝ってすむとは思ってもないんだけど……でも……」
「……寝ぼけて……たんだよね？」
「え？　まあ……うん」

そのとおりだったので、ユーノは素直に頷いた。
いや、だからといって、許される問題ではない。
しかし、なのはは顔をあげて、にっこりと笑った。もう泣いてはいなかった。

「気にしないで、ユーノくん」

まぶしすぎる笑顔が意外すぎて――もう笑いかけてはくれないだろうと覚悟していたので――ユーノは言葉を失う。

「私も、勝手に部屋に入っちゃって、ごめんね」
「あ、いや、別にそれは――――」
「でも、ユーノくんも無用心だよ。鍵、あけっぱなしで寝ちゃうなんて」
「……ごめん」

――そんなつらそうな顔をしないで。
そう言いそうになって、なのはは口ごもる。
「……本当、無用心だよ」
「なの――」
ユーノは伸ばしかけた手を止めた。
ぽろりと、なのはの両目から大粒の涙がこぼれたからだ。
それに気づいて、なのはは必死に涙を止めようとする。
いやだ、どうしよう。
泣くつもりはなかったのに。
（ユーノくんを困らせちゃう……。ユーノくんはただ寝ぼけただけなんだから……なにも悪くないんだから……傷つく必要なんかないのに――）
笑わなくては。
やさしいユーノは、今でも十分傷ついているのに。
これ以上重荷を背負わせたくない。
だけど、もう、顔すら直視できない。
弱い自分にほとほと情けなくなり、なのはは自分を殴りたくなった。
そんななのはを、ユーノは思わず抱きしめていた。
自分のばかさかげんに嫌気がさした。こんなことをする資格がないのはわかっていたけれど、他にどうすればいいのかわからなかった。
「……ごめん。なのは……」
「……ちが……」

「本当にごめん。もう二度とこんなことしない。誓うよ。なんでもする。許してくれなくてもいい。だから、泣かないで――」

やさしすぎる言葉に、なのはは涙を止めることができなかった。
ぬくもりが愛しくて、逃げることもできずに、ただやさしさにすがって、涙で濡らし続けた。

ちがうの。
いやだったんじゃない。
うれしかった。
キスも、触れてくれたことも、すごくすごくうれしかった。
気持ちがなかったことが哀しいだけ。
こんなにもあなたを求めているのは私だけだと自覚してしまうのが、どうしようもなく哀しいだけ。
やさしいユーノくん。
大好きなユーノくん。
それでもこの手を手放せない私は愚かですか。
私の一番好きな人。
――あなたの一番好きな人はだれですか？
それが、私ならいいのに。

次の日、無限書庫にフェイトが現れた。
すぐに理由を察したユーノは、空いている休憩室に誘った。
お茶を渡されたフェイトは、前置きなく、直球で話題を切り出した。

「なのはの元気がないの」

「……そう」

予想していたことだったが、それでもユーノは表情を曇らせた。

昨日は、なのはが泣きやむまで抱きしめていた。そして「もう大丈夫」となのはが笑ったので――無理をしていると一目でわかったけれど――部屋まで送って、そのまま別れたのだ。

「いつもと同じようにふるまっているけど……無理してることくらいわかるよ」

「うん」

笑わなくてもいいのに、と、フェイトは思う。

仕事中は仕方ないとしても、二人のときでさえなのはは普通にふるまおうとするから。

そして理由は、確証はないけれど確信があった。

良くも悪くもなのはをあそこまでゆさぶることができるのは一人しかいない。

目の前の青年、ユーノだけなのだから。

「なのはと、なにかあった？」

「……うん。あった」

ユーノは隠すこともなく、素直に頷いた。

フェイトはためいきをつく。やっぱりである。これでは、フェイトは手が出せない。

なのはを本当に笑わせることができるのはユーノだけだ。

（ユーノへの気持ちを自覚して、なのははすごく、苦しんでいた……）

変わってしまうものをおそれて。
築いた絆が壊れてしまうことをおそれて。
それでも止められない思いを抱えて。

「……ひとつだけ聞いてもいい？」
「うん」

迷いない言葉。
まっすぐなまなざし。
やさしさの中に、確かな意思を宿して。

「なのはのこと、好き？」
「……好きだよ」

ユーノが笑うと、フェイトはためいきをついた。

「ユーノは、その笑顔が曲者なんだよなあ」
「ええ？　なに、それ」
「……あんまり、なのはを泣かせないでね」
「うん。ごめん」
「私に謝らなくてもいいよ」
「うん。あの――――フェイト」
「うん？」
「ありがとう。心配してくれて」
「心配なんて、当然でしょ？」

なのはもユーノも、フェイトの大切な友人で、恩人でもあるのだから。
フェイトの心を救ってくれたのはなのはだけれど、ユーノがいなければ、フェイトはなのはと出逢うことはできなかった。

ユーノがいなければ、なのははフェイトのもとへかけつけることはできなかった。
いつも、いつでも、ユーノくんが助けてくれたんだよ。
そんなふうに笑うなのははとても可愛くて。
フェイトが笑えるようになったのはなのはのおかげだけれど、なのはが笑っていられるのは、ユーノが支えているからなのだとわかった。
だから――――

「ちゃんと、仲直りしてね」
「うん。わかった」

ユーノが笑って頷いたので、フェイトも笑った。

なのはのことを考える。
このごろ、なのはのことばかり考える。
笑っている顔。
怒っている顔。
困っている顔。
真っ赤になっている顔。
思い出の中にあるたくさんの顔。
だけど、やっぱり思い出してしまうのは、あのときの泣き顔。
――――ああ、僕は、どうしてあんなことをしてしまったんだろう？
自分で自分が理解できない。
なのはのことは好きだ。
もちろん大好きだし――――特別だと思う。
他の誰かと比べることなんかできないほど。

だから、なのはをあんな形で泣かせてしまったことが、罪悪感を肥大させる。
……そんなにいやだったのだろうか。
僕は、すごく気持ちよかったんだけど……。
って、そういう問題じゃない。
何を考えているんだ、僕は。
とにかく――――謝らなくちゃ。
あのときも謝ったけど、それはもう死ぬほど謝ったけど、あんなものじゃ足りない。
簡単に許してもらえるようなことじゃないのはわかってる。
だけどせめて……ムシがよすぎるのはわかってるけど、前のように、普通に話とかできるように。
……やっぱりムシがよすぎるか……。
いくらなんでも。
がっくり、と、僕は肩を落とさずにはいられない。
……あのとき入ってきたのが。もしなのはじゃなくて、たとえばフェイト、だったら。
僕は、同じことをしたんだろうか……？
想像もできない。
たぶん、しなかったろうな、と思う。
確証はないけれど、確信に似た感情。
だって、あのとき僕は、夢の中でもなのはにキスをしていたんだ……。
……ってことは、あれ……？
胸が、ときりと変な音を立てる。
――――あれ？
僕は、他の誰でもなく、なのはにキスをしたかったんだ。
！！

とんでもない考えに行きついて、僕は凍りつく。
そしてすぐに、身体の芯からかあっと熱くなっていくのを感じた。
思い出す。
思い出す。
思い出す。
傷ついた僕にさしのべられた唯一の、そして絶対の、やさしすぎる手のひら。
やさしさが心地良すぎて、まきこみたくなくて遠ざけようとした距離を、彼女はひらりととびこえて。
それから———それからは、ずっと、一緒だった。
奇跡のような出逢いだった。
君が僕の世界を変えた。
世界がこんなにも光り輝いていてやさしいものだと教えてくれた。

———ユーノくん。大好き。

走馬灯のようにかけめぐる思い出に耐えかねて、僕はその場に座り込んだ。
なんということだろう。
ずっと否定し続けていた答えだというのに。
変わりたくなかったから。
変わってほしくなかったから。
今のまま、穏やかな気持ちのまま、君とともにありたかったから。
そう、できるなら———ずっと。
なんて傲慢なのだろう。
なんて身勝手なのだろう。
そうして結局、泣かせてしまったじゃないか。
「……クロノに馬鹿にされても、仕方ないかもな」

さすがに、自己嫌悪で穴に入りたい。
脳裏に焼きついて離れないのは涙。
誰よりも、自分よりも、大切にしたかったのに。
なのは――――あのね、なのは。
いつだったか、クロノに言ったんだ。
きみのしあわせを一番に願っているのはきっと僕だから。
その助けにこそなれ、邪魔をするつもりは毛頭ない。
でも、なのは。
ごめんね。

僕は、きみが好きみたいだ。
たぶん、恋とか愛とか、そんなふうに呼べてしまう感情で。

だから少しだけ、きみを困らせてしまうかもしれない。
きみの笑顔を曇らせてしまうかもしれない。
終わりにすることはきっとできないけれど、封じこめることはできるから。
一度だけだから。
そうしたら、全てを閉じ込めて、元に戻れるから。

「……もしもし、なのは？　うん、そう……ユーノだけど。――――大切な話があるんだ。いつでもいいから、時間をくれないかな？」

ホシイロセカイ（後書き）

考えてみればユーノはけっこう最低なことしてますね……。寝起きで頭が働かなかったんでしょう。ウン。そういうことってありますよね。まあでも、ふりまわされるなのはが不憫なんでしょうか……。続く、ですみません汗。次の話でひと段落つきます。

「そして、きみが笑った。」（前書き）

ユーノから「逢おう」と連絡を受けて、なのはは自分の心を見つめ直す。ゆっくりと、ゆれていたさざなみが静かになっていくのがわかった。ユーノが好き。そうか。それは———悪いことなんかではないのだ。

「そして、きみが笑った。」

――――世界はあの瞬間、色を変えて私の視界にふりそそぎ。
まばゆい日の光を伴って、心のすべてを強引にばらばらに砕いてしまった。
隠し事。
言えなかったこと。
言いたくないこと。
閉じ込めていたもの。
誰にも触れられないように、見つからないように、奥底で抱きしめていた大切なもの。
粉々に砕け散ったそれらは、闇の中にとどまることをこれ以上許してはくれなかった。
あふれだしてしまったのは世界が変わってしまったから。
止められないのは私がもうそれを望むことができないから。
泣いてもいい。
傷ついてもいい。
報われなくても、変わってしまっても、戻れなくても。
私は進んでしまうだろう。
どんなに欲深い罪だとしても。

それでも最後にあなたと、「笑っていたい」と願ってしまうのだから。

ユーノから電話があったのは、ユーノの部屋を訪れたあの日から、二日後のことだった。
特別なことはなにも喋らなかったと思う。用件だけ話して、すぐに切れてしまったから。
けれどユーノの声はとても静かで、その声の水面に惹かれるように、なのはのざわついていた心もまた、静かに音を鎮めていった。
電話を切ったときには、逢う約束をしていた。

（三日後の夜……）

少しだけ時間が空いていることが嬉しかった。すぐにでも逢いたい気持ちもあったけれど、もう少しだけ、自分の気持ちとゆっくり向き合う時間がほしかったから。
耳に残るやわらかな、自分を呼ぶ声が愛おしかった。
とくん、と、心臓が心地良い音を立てる。

（……好き）

ああ、なんて、心地良いのだろう。
ふわふわとやさしい風に包まれているみたい。
ちょうどいいお湯加減のお風呂にも似ている。
「好き」という気持ちは、憧れもあったけれど、ユーノとの間にあるものではないと思っていた。
あってはいけないと思っていた。
だから気持ちに気づいたとき、どうしても、「間違っている」という罪悪感が拭えなかった。
――――なによりも怖かったのはそのことなんだと、なのはは思い至る。
けれど、ちがう。
この気持ちは恋だった。

ずっと、恋だったのだ。
今までの、ユーノに出逢ってから今までのすべてが恋だったのなら、間違っているわけがない。そんなこと、あるはずがない。
ならば、なにを怖れる必要があるのだろう？
そう、そんな必要はない。
必要なのは、勇気だけだ。
変わることを怖れずに、変えていくことをためらわない勇気だけを胸に。

唇に、ひとさしゆびでそっと触れる。
キスをした。
———気持ちのあるキスではなかった。
けれど、それでも、なのはにとってははじめてのキス。
その熱が、愛しかった。

「……なのは、なにか、いいことあった？」
フェイトの言葉に、なのははすすめていた箸を止めて、「うーん」と考える。
「まだ、ない」
「……まだ？」
「あるかもしれないし、ないかもしれないの。でもね、まだ、わからないんだ」
にゃはは、と、なのはが笑ったので、フェイトはほっとする。
言っている意味はよくわからないが、とりあえず浮上したらしい。

一時期の落ち込みようは見ていられなかったから。

「ちゃんと全部終わったら報告するね。落ち込んでるかもしれないから、そうしたら、フェイトちゃん、慰めてくれる？」

「もちろん。……でも、落ち込んじゃうかもしれないの？」

心配そうに眉をひそめるフェイトに、なのはは「えへへー」と笑った。

「落ち込まないようにがんばるつもりだけど」

「ユーノ……のこと？」

「！」

なのはの顔が一気に赤くなる。

あまりのわかりやすさに、フェイトは思わず笑ってしまった。

「……フェイトちゃん、どうしてわかったの？」

「最近のなのはの一番の心配事……だからかな」

「あうう……。……うーん、そっか。そうかも……あう、でも。そんなにわかりやすいかなぁ」

「なのはは、なんでも顔に出るから。……告白するの？」

「……まだ、秘密」

「まだ？」

「うん。まだ」

「そっか」

ふたりの間には、それだけでじゅうぶんだった。

くすくすと笑いあう。

花のように笑うなのはがとても綺麗だと思うのは、気のせいではないのだろう。

そしてそれは、たったひとり、ユーノに向けられたものなのだ。
落ち込んだなのはを慰める必要はなさそうだと確信して、フェイトはほっと安心した。

なのははとりあえず深呼吸をした。
いくらなんでも待ち合わせ時間の一時間前は早すぎただろうか、と思うが、気が逸ってどうしても待ちきれなかったのである。
待ち合わせ場所の噴水の前で、なのははそわそわと落ち着かなかった。
いつもなら楽しみで「わくわく」なのだが、今日はいろいろな要素が複雑に組み合わさって、適切な言葉は出てこない。
心臓の跳ねる音が聴覚のすべてを支配しているかのようだ。
もう覚悟は決めたはずで、迷いはないはずなのに。

（……情けないなあ、もう。凶悪犯罪者捕まえるほうがよっぽど――なんて、不謹慎なんだけど）

空も心なしかどんより曇っていて、幸先が悪い。
こういう日はさわやかに晴れてほしいものだ。
これで雨まで降ったらどうしよう。不幸すぎる。

「……神様の意地悪」
「どうして？」
「だってこんなに雲が――――きゃあっ！」

なのはは驚いて悲鳴を上げた。
いつのまにか後ろにいたユーノは、ぱちくりと眼を瞬かせた。

「……ご、ごめん。驚かせた？」
「う、ううん！　ちょっと考え事してたから――――は、早いね、ユーノくん。まだ一時間も前なのに」
「うん。なんだか落ち着かなくて――――なのはこそ、僕より早かったね」
「……う、うん。私も、なんだか落ち着かなくて……」
「そっか」

眼と眼が合って、くすりと笑いあう。
二人とも緊張しているんだなあ、と、伝わる。
わかってしまうことがうれしくて、今は少し、くすぐったくて切なかった。
ユーノは空を見上げて訊ねる。

「雲がどうしたの？」
「あ、ええっと、……曇ってて、ちょっと残念だなって」
「それで、神様が意地悪？」
「うん。だって、今日は大切な日だから。雲ひとつない真っ青な空が見たかったの」

ユーノの深緑の瞳を覗きこめば、凪いでいた心が驚くほど静かになっていく。
心臓の鼓動は、あいかわらず存在を主張し続けているのに。
ユーノは首をかしげた。

「大切な日？」
「まだ秘密。――――ユーノくんのお話から、でしょ？　順番としては」
「……そうだね」

ユーノの笑顔から、仕草から、言葉を読み取ろうと思うのに、なのはにはなにもわからなかった。
ただ、眼を逸らすことはできなかった。もちろん、逸らしたいなどと思ったわけではないけれど。
そう――なのははこの眼を知っていた。今までにも何度か見たことのある眼だった。
なにかを決めた眼。もう、誰にも変えることのできない決意を秘めた瞳。
いつだってやさしくて、誠実で、誰にでも公平なユーノは、決して流されやすい性格ではなかった。大切なことを自分の力で、自分の心で選ぶことから逃げることはしない。
少しだけ、息が苦しかった。
けれどどんな言葉でも、ユーノの真実の言葉なら、なのはも逃げずに受けとめたかった。
そう、なのはにとっての真実を伝えるために。

手を伸ばせば触れられるほど近い場所に、なのはが佇んでいる。
ユーノはそれを、複雑な気持ちで見つめていた。
とてもうれしくて、ほんの少しでも距離があることがとてもはがゆくて、手を伸ばしたくて、その資格をまだ得てはいないのだとためらって。
簡単な言葉のはずなのに、咽喉にひっかかって、うまく出てこない。つくづく、自分は臆病者だな、と思う。
（――それでも）

なのはの瞳は、まっすぐにユーノをうつしているから。
初めて出逢ったときのことを思い出す。
ユーノの「声」に、ただひとりこたえてくれたのは彼女だった。
「独り」でいることを許さなかったのは彼女だった。
光を与えてくれたのは、共にいてくれたのは、やさしさをくれたのは、彼女だった。
そう。
出逢った時からずっと――――本当は、きみに惹かれつづけていた。

「なのは。僕は――――」

すう、と、息を吸う。
せめて、届いてほしいから。
偽りのない心を、きみに伝えたいから。

「僕は――――なのはが好きだよ」

するりと、言葉がこぼれた。
つっかえていたことが嘘のようで、ユーノは自分で自分にびっくりする。
ぽかんと眼を見開いて言葉もないなのはの反応は予想済みだったので、背負いこませないようににこりと笑う。
一番心配だった、「友情と勘違い」されている様子はないので、そこには心底ほっとする。

「この間のことは、本当にごめん」
「……」
「でも、たぶん、あれが、僕の本当の気持ちなんだと思う。……ちょっと情けないけど。ずっと前から、僕はきっとなのはが好きで、でも、絶対に気づきたくなかったんだ」

「……どう……して？」

しぼりとるようななのはの声に、少しだけ胸がきしむ。
ああ、泣かせたいわけじゃない。
苦しめたいわけではないのに。
どうして、うまく全てを伝えられないのだろう？
きみがそんな顔をすることはないと、かけらだって傷ついたりすることはないと、早く伝えなければ。

「泣かないで。なのは」
「……泣いてない」
「ごめんね。迷惑だった？」
「ちが――――」
「いいんだ。僕、なのはに無理はさせたくない」
「……」

なのはが押し黙る。
うつむいてしまったので、顔はもう見えなかった。
ユーノは慎重に言葉を選ぶ。

「……ずっと、自分の気持ちに蓋をしていたのは、今の幼なじみとか、友達っていう関係が、とても居心地がよくて――――よすぎたからなんだと思う。なのはに、甘えていたんだね。気づかなければこのままでいられるって、パンクしかけていることにも気づかなかった。僕の気持ちはきっと、なのはには重荷だろう？　きみが僕を、そういう対象として見ていないのはわかってる。だから、忘れてくれてかまわない。ただ、この間のことを、もう一度きちんと謝って、なのはに――――」
「……ユーノくん」

なのははぐい、と顔をあげて、ぎろりとユーノを睨みつけた。

（え？）

いきなりなのはの雰囲気が変わって、ユーノは眼を剥いた。
怒っている。
怖い。
ユーノは思わず逃げ出したくなる。でもわけがわからない。
どうしていきなり怒るのだろう？
さっきまで泣きそうだったのに。

「……私、だんだん腹が立ってきた」

見ればわかる。
ユーノはかすかにあとずさりをした。

「な、なんで……？」

なのははずずい、と距離を埋めて、すう、と大きく息を吸った。

――なんだか、もう、本気で、腹が立ったのである。

「……ユーノくんの、ばか――――っ！」

至近距離で怒鳴られて、ユーノはきいいいん、と、耳鳴りがした。
なのははぜいぜいと肩で息をついている。
しかし、眼光の鋭さは増すばかりだった。

「な、なの……？」
「ばか、ばか、ばか――――っ！　なに、それ？　なんでそうなるの？　やさしさのつもりなの？　勝手に、自分だけで納得しちゃって、自己完結しちゃって、私の気持ちはどうなるの？　ユーノくんのおばか――――っ！」
「え？　え？　あ、ご、ごめ……」
「ごめんじゃない！」

とりあえず謝ろうとすると、びしっと怒鳴られてしまったので、ユーノはびくりと肩をすくめた。
実はなのはは涙眼だったのだが、気づく余裕はまるでなかった。

「……思い出した。ユーノくんは、いっつもこうなんだ！」
「え？」
「初めて逢ったときだって、手伝うって言ってるのに、迷惑かけるわけにはいかないとかうるさいし。今までだって、ちょっと怪我したり、危なかったりするたびに、私を魔法の世界にひっぱりこんだのは自分が悪いってうるさいし。心配も、気にかけてくれることも、いっしょにいられるのも、私は全部うれしいのに、うれしいって言ってるのに、納得してるようでやっぱりすみっこのほうで自分を責めてるし！　ほんっとに人の話きかないんだから！」

一気にまくしたてられ、ユーノはぐうの音も出なかった。
あいかわらず事態は理解できなかったが。
なんで、なのはは怒ってるんだろう？
確かさっきまで、シリアスな雰囲気の中ユーノは粛々と告白をしていたはず――――
「あげくには迷惑？　迷惑ってなに？　私、一言もそんなこと言ってないのに！」

「そ、そうだよね。ごめ――――」
「ごめんじゃない！　だから、勝手に、簡単に、謝らないでよ！」
そこでなのはは言葉を切って、ぜえはあと息を整えた。
……謝ってもいけないとは、では、ユーノはどうすればいいのだろう。
「……私は」
ぼそりと、なのはがつぶやくので、ユーノは耳を近づけた。
「え？」
「私は……うれしい」
「え？　なにが？」
「ばか！」
「え」
なぜ？
「ばか！　もう……もう、泣いちゃうんだから！」
「え、なん――――そ、それはちょっ……！」
「……泣かれるの、いや？」
焦り出したユーノに、なのはは首をかしげてたずねる。
当たり前である。
ユーノがぶんぶんと首をふって頷くと、なのははにっこりと笑った。
「じゃあ、もう一回言って」
「なにを？」

本気でわからないユーノのやわらかい頬を、なのははむすっとしてつねった。
自分で考えろということらしい。
もう一度？
謝れということだろうか。
いや、でも、「ばか」と言われたし。
しかし言わなければ泣くようだ。それは困る。
なのはの泣き顔は、一番見たくないのだから。
では、なんだろう？
もう一度、ということは、一度言った言葉なのだ。
えーと。

（……「迷惑」も怒られたし……もっと前か？　前っていうと――）

「ああ！　『好き』？」

ぽんっと手をたたくと、ふたたびみょーんと頬をつねられる。
当たりらしい。が、こんなふうに言ってはいけなかったらしい。
むう、と眉間にしわがよっている。
じっとなのはを見つめると、心なしか頬が赤くなった。

（……可愛い）

思わず見惚れてしまって、ユーノは自分を殴りたくなった。
そんな場合ではない。
ともかく、なのはが望んでいるのだから、言わねば。
しかし、あらたまるとなんと恥ずかしい言葉だろうか。

「ええと。――なのはが、好きだよ」
「私も、ユーノくんが好き」
「そう、ありが――え？」

ほっと息をついたのも束の間、なのはの言葉に、ユーノはぽかんとする。
え？
なに？
想像もしていなかった返事だったから、ユーノは思わず、まじまじとなのはの顔を見つめてしまった。
なのはは眼に涙を浮かべて、それでも笑っていた。
「ユーノくんが好き。大好き。『迷惑』じゃなくて、『うれしい』。だから――『ごめん』はなしだよ。ユーノくん」
「なの――わあああっ！」

ぼろぼろとなのはが本格的に泣き出したので、ユーノはあわてた。
「なの……なのは？　ど、どうしたの？　なんで泣くの？」
「……う」
「う？」
「うわあああああん！」
「え？」

大声を上げて抱きついてくるなのはを受けとめて、ユーノは眼を瞬かせた。
状況に頭が追いついてくれなかったのである。
（……あれ？　もしかして……つまり、なのはも僕を好きってことは――うん？　両思いってことで、あきらめたり封じ込めたりし

なくてもいいってことなのかな？　……でもなんでなのはは泣いてるんだ？）

ユーノはおろおろとしながら、それでもしっかりとなのはを抱きとめていた。

その腕の中で、そのやさしさに、さらに涙が止まらないなのはは、わあわあと泣き続ける。

うれしかった。

まるで、奇跡のようだと思った。

本当は不安だった。

本当は、怖くて怖くてたまらなかった。

思いを伝えて、拒まれることを想像しただけで、胸がふるえた。

もしかしたら「友達」にさえ戻れないかもしれない。

ううん、「友達」だけでは、きっといつか、なのはは笑えなくなってしまうだろう。

ユーノが「好き」と、なのはを好きだと言った瞬間、なのはに、卒倒してしまいそうなほどの幸福の波が押し寄せた。

ユーノは何も知らない。

そう、きっと、なにもわかってはいない。

どれほどの思いをなのはに与え続けたのか。

うれしくて、しあわせで、あふれてどうしようもなくて涙を流していることも。

それでもいい、と、思う。

わからなくても、ユーノはこうしてなのはを抱きしめるから。

なのはがもう一度笑うまで、そばを離れたりしないから。

だからなのはは安心して、子どものように泣きじゃくっていられる。

「……なのは？」

やさしく自分を呼ぶ声に、なのはは顔をあげて、ふわりと微笑んだ。

「そして、きみが笑った。」（後書き）

両思いです。６話目にして。ユーノはいまだポカンとしていますが。でも両思いです。だれがなんて言おうとも！このあとは恋人同士になったふたりや、ちょっと過去にさかのぼって昔のユーノとなのはのお話などを書いていければと＾＾

番外編「逢いたくなったら」（前書き）

１２歳くらいのユーノとなのはのお話。一カ月ぶりに、ユーノから電話がかかってくる。ひさしぶりにきくやわらかな声に、なのはの心は満たされる。

番外編「逢いたくなったら」

君に逢いたくなるのは、どんなときだろう？

「もしもし」
「ユーノくん！」

声だけで、なのはには誰だかわかってしまった。
思わず大きな声を出してしまったのは、その声を聞くのが、本当に久しぶりだから。
ユーノはここ一ヶ月ほど、ミッドチルダに里帰りをしていたのである。

「久しぶり、なのは」

電話から伝わる声は、一ヶ月前に聞いたものとなんら変わってはいなかった。そのことがなんだかうれしくて、なのはの声もはしゃいだものになる。

「お帰りなさい。ユーノくん。今、どこ？」
「今はアースラの中だよ。さっそく、クロノにイヤミを言われたけどね」
「イヤミ？」
「『やあ、久しぶりだね。いやあ忙しかったよ。君でもちょっぴり

なら役に立っただろうに、いないからなおさら忙しかったよ。ああ、それで、里帰りはどうだった？』」
「あはは」

クロノの口真似をするユーノに、なのははくすくすと笑った。

「ミッドチルダはどうだった？　久しぶりに、一族の人にも逢えたんだよね」
「うん。まあ、みんな、特に変わったところはなかったけど、やっぱり懐かしかったかな」
「そっか。よかったね。逢えて。……ユーノくん、お休みはいつまでなのかな？」
「明日まで。明後日には本局に戻らなきゃいけないんだ」
「……明日、時間、取れるかな？」

なのはの言葉に、ユーノは笑ってうなずいた。

「うん。大丈夫だよ」
「本当？　逢って、話せる？　明日は日曜日だし、私も仕事は入ってないんだ」
「そっか。じゃあ、逢おうよ」
「うん！　あのね、話したいこと、たくさんあるんだよ」
「うん。僕も」

なのははぱっと笑顔になる。ほんのりと、胸の中があたたかくなった。

「それじゃあ明日、なのはの家に迎えに行くから」
「うん。待ってるね。えっと、じゃあ、おやすみなさい。電話ありがとう。それから――」

「うん？」
「本当に、お帰りなさい。ユーノくん」
「……うん。ただいま」

「おはよう！　お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん！」
なのはの笑顔を見て、家族全員は顔を見合わせた。この元気はどうしたことだろう。
最近は落ち込んでいるわけでも、悩みがあるわけでもないのに、家族にしかわからないほどかすかにではあるが、元気がなかったというのに。
「おはようなのは。なにかいいことでもあったのか？」
恭也が単刀直入に尋ねると、なのはは満面の笑みで素直にうなずいた。
「うん！」
足元は軽やかにステップを踏んでいる。……無意識ではあるようだが。
まあ、家族のマスコット的存在であるなのはが元気なのはいいことである。
「なになに？　なのは、どんないいことがあったの？」
「えへへ。ユーノくんがね、しばらく里帰りしてたんだけど、昨日帰ってきたんだ。それで、今日、久しぶりに逢えることになったの

ー」

……なるほど。

家族はまた、全員で顔を見合わせ、眼で会話をした。

（それってそーゆーことだと解釈していいのかなあ）

（……とりあえず、なのはは自覚してないと思うんだが……）

（……父さんは複雑だ）

（あら、ユーノくん、とってもいい子じゃない。ママはいいと思うなあ）

「？？　どうしたの、みんな？」

「あ、ううん。なんでもないよー。なのは」

「そうそう、なんでもないぞ、なのは。よかったな」

「うん！」

るんるんと、なのははテーブルに食器を並べる。

なぜだか父親の笑顔がひきつっていたが、なのはにとっては瑣末な問題であった。

「こんにちは、みなさん。お久しぶりです」

「あー、ユーノじゃん。久しぶりー。……でも、今日はフェレットじゃないのかぁ」

「……あの……すみません」

ユーノは苦笑しつつ頭を下げた。美由希は「あはは」とユーノの肩を叩いた。

「冗談だよ、冗談。待ってて、なのは呼んでくるから――――」
「お帰りなさい、ユーノくん！」
「……あれ、呼ばなくても来ちゃった」

インターフォンの音がしたと同時に、なのはは準備をして階段を駆け下りたのである。
美由希は笑って、ユーノに耳打ちをした。

「昨日からすごーく機嫌がいいの、なのはってば。ありがとね、ユーノ」
「？　はあ」

わかっていない様子のユーノに、美由希は苦笑した。

（……おにあいだとは思うけど、進展は亀の歩み……かも？）

「じゃあお姉ちゃん、行ってくるね」
「失礼しました。帰りも、ちゃんと送りますから」
「あ、うん、よろしくねー。なのは、いってらっしゃい」

笑顔で二人を送り出した美由希は、「なにか策を練るべきかしら」と、二人の将来を真剣に案じたのであった。

「はい。いちごでいいんだよね？」
「うん。ありがと、ユーノくん」

なのははユーノからクレープを受け取ると、にこっと笑った。ユーノもつられてほほえむ。
久しぶりに逢うなのはは、なんだか新鮮だった。何も変わらないはずなのに、心臓がうるさくてしょうがない。……というほどでもないのだが、ふとした仕草や表情に、どきりとしてしまうのだ。
二人は並んでベンチに腰かける。空は鮮やかな青で、雲ひとつ浮かんではいなかった。

「ミッドチルダはどうだった？　あ、というより、スクライアの人たち、なのかな」
「うん。そうだね。発掘やら執筆やらで、逢えない人も結構いたんだけど。でも、久しぶりだったから、いろいろ報告したり、されたり」
「報告されたの？」
「うん。結婚してる人もいて、びっくりした」
「結婚？？」

それは、なのはにもユーノにも、まだまだ現実感のない言葉だった。「ほえー」となのはが驚いていると、ユーノはためいきをつく。
「その二人っていうのが、まあ、僕の兄貴分と姉貴分というか、結構お世話になってた二人だったんだけど。僕の知る限り、いつも喧嘩してたからさ。本当に驚いた」
「喧嘩してたの？」

なのはは自分の父と母を思い出す。仲がよすぎるくらいに仲のいい二人を見慣れているなのはにとっても、それは不思議だった。
「うん。もう、一族の名物みたいになってた。喧嘩するほど仲がいいって言うし、本当は仲良しだっていうのも知ってたけど。でも、

まさかなぁって。しかも、結婚してからも変わらず喧嘩はしてるみたいだし」
「ふうん。それが、帰って一番驚いたことなの？」
「うん。なのはは、なにか変わったことあった？」
「私は、特にないかなぁ。学校行って、友達と遊んで、管理局のお仕事して、翠屋のお手伝いをして、それから……それくらいかな。いつもと同じ」

それくらいって――――それだけしていれば十分であろう。
ユーノは思わず、なのはの頭の上に手をのせて、なでなでと撫でてしまった。
なのははぽかんとして、ユーノを見つめる。

「……ユーノくん？」
「……なんにでも一生懸命なのはなのはのいいところだけど……。あんまり無理したら駄目だよ」

やさしい笑顔。
額に感じるあたたかなぬくもり。
ふとこぼれる。笑いたくなる。――――離れていれば、逢いたくなる。君に。
なのはは素直に頷いた。
「うん。気をつけるね」
「うん。気をつけて」

離れていれば、逢いたくなる。

楽しいことやうれしいことは、一番に知らせたい。
哀しいことがあって、泣きたいときは、隣にいてほしい。
忙しくて疲れたときでも、笑顔を見れば元気になれる。
逢いたくなって名前を呼べば、心はすぐ近くにあることに気づく。
だから。

「ユーノくん、明日から仕事だよね」
「うん」
「また、電話してもいいかな」
「うん」
「……えーと。ユーノくんがいなくて、結構寂しかった」
「僕も、なのはに逢えなくて、寂しかったよ」
「また、いっぱい逢って、いっぱい話そうね」
「うん」

生まれたのは小さな気持ち。
出逢えた奇蹟を忘れないように。
逢いたくなったら名前を呼ぶね。

番外編「逢いたくなったら」（後書き）

小学生の話なので、恋とかラブな感じはまだ出てませんが、すでにこの時点で両思い、なお話。ここからあしかけ４年。長い（笑）はじめて書いたユーなのＳＳです。感慨深いです。

番外編「幸福の意味」（前書き）

仕事中に倒れたなのはを見舞うユーノ。心の中には、ずっと、ひとつの後悔があって……。ふたりが恋人同士になる半年～一年ほど前のお話。十五歳くらい？

番外編「幸福の意味」

帰りたいと思える場所。
帰ってきたら、一番に逢いたいひと。
いつでも変わらずに、「おかえり」と言ってくれるひと。
あなたが待っていてくれるから。
あなたがそこにいてくれるから。
わたしはどこまでも飛んでいける――――

きみに逢えてうれしい。
きみに逢えてよかった。
心からそう思うけれど。
めぐる思いは決して消えない。
きみは幸福だろうか。
ずっと幸福でいられるだろうか。
この道を選んで、決して後悔せずに、歩き続けていけるだろうか。
ぼくはいつも、そうやって考えることしかできないのだけれど。
そして、きみはきっと、笑うのだろうけど。

「――――なのは」

眼が覚めたら、本局の医務室の一室だった。
なのははぼんやりと覚醒しない頭をめぐらせて、なぜベッドで寝

ているのかを考える。
声のしたほうに眼を向けると、すきとおった翡翠の瞳と眼が合った。

「……ユーノ、くん」
「うん」

ユーノがふわりと微笑んだので、なのははほっとして、起き上がろうとする。しかしユーノはなのはの肩を押さえてベッドに押し戻す。

「まだ駄目だよ」
「ユーノくん」
「身体、重いだろう？　寝不足と過労だって。……まだ、顔色がよくないよ。なのは」

ユーノの顔から笑顔が消える。まゆをひそめて、心配そうになのはを見つめていた。
大丈夫だよと言ってあげたくて、なのはは手を伸ばす。
その手を握りしめて、ユーノは自分の額にくっつけた。ときん、と、なぜか胸が高鳴って、なのはは少しだけ緊張する。

「……ユーノくん？」
「心配したよ」

ああ、そうか。
思いだした。
確か、事務仕事を片付けている間に、急に意識が遠のいて――――たぶん、なのはは倒れたのだ。
連絡を受けたユーノはずっとついていてくれたのだろう。

「……ごめんなさい」
「……」
「……ユーノくん。どうしたの？　なんだか、変だよ」

ぴくりと、握りしめられた手に力がこもる。
なのはが起き上がっても、今度はなにも言われなかった。顔をあげたユーノと眼が合う。
深い翡翠の瞳。
吸い込まれて動けなくなる。
次の瞬間、ユーノはなのはを抱きしめていた。あまりにも自然に、しかし強く。
ユーノのぬくもりがあたたかくて、心地よくて、なのははなぜか泣きそうになった。けれど考えても、理由はわからなかった。
ユーノは、「ごめん」と謝りたかった。
五年前、ジュエルシードをユーノが見つけなければ。
なのはに助けを求めなければ。
魔法や、ロストロギアや、ほかのたくさんのしがらみを、彼女は背負わなくてもすんだのに。
あまりにも突出した魔力と才能。
ユーノが見つけなければ。
――ユーノが出逢わなければ。
なのははこんなふうに倒れることも、あのときのように傷つくことも――
けれど、言わない。
そんなことは、言ってはいけない。
なのはは自分で選んできたのだ。きっかけはユーノでも、なのはは流されたりしない。
自らの意思で選んで、決めたのだ。
だから、「全てが自分のせい」だなどと思うのは傲慢なのだ。

だから――でも。
抱きしめる腕に力をこめる。
いつか、消えてしまいそうな気がする。
がんばって、がんばって、笑って。
いつか――ユーノの前から。

「なのは」
「は、はい」

名前を呼ばれて、なのははびしっと固まった。
どうして、こんなにどきどきするのだろう。

「今、しあわせ？」
「……？」
「魔法使いになって、こうして時空管理局に勤めて、毎日へとへとになるまで仕事して、倒れちゃっても――しあわせ？」
「うん」

迷う必要はなかった。なのははうなずく。

「大変だけど、辛いこともたくさんあるけど――すごくしあわせだよ。だって、一人じゃないし……フェイトちゃんや、はやてちゃんや……」
「……」
「――ユーノくんも、こうしてそばにいてくれるから」

ためらいがちに、なのははユーノの肩に顔を寄せて、力をぬく。
胸の鼓動はおさまらないけれど、ずっとこうしていたいと願う自分がいた。
初めて出逢ったあの日に、なのはの運命を変えた人。

そしてその日からずっと、離れていても、隣にいても、なのはを守ってくれた。
だからなのはは戦える。
前を見つめて、どこまでも走っていける。
背中がいつもあたたかいから。
ユーノがいつも、いてくれるから。
なぜ、そんなことを聞くのだろう。
なぜ———そんな哀しそうな声で、たずねるのだろう。
なのはは不安になって、ぎゅうっとユーノを抱きしめた。その存在を確かめるように、ユーノがしたことと同じように。

「……ユーノ、くん」
「うん……」
「ユーノくん、いやなの？」
「え？」

いきなりわけのわからない言葉だった。
驚いて身体を離すと、なのはがずいっと必死な顔で詰め寄る。

「私が魔法使いやってるの……っていうか、本局に勤めてたりとか、……ユーノくんのそばにいるのはいや？」
「そんなこと、ありえないよ」

ユーノはきっぱりと否定する。
そんなことはあるはずがない。むしろその逆である。
ユーノにとって、なのはは一生の恩人であり、友人であり、もしかしたら、誰よりも特別な存在かもしれない。
そんななのはと同じ場所にいられることは、ユーノにとっては喜び以外の何物でもないのである。ただそんな思いさえ、なのはが今背負っているさまざまなものを思うと、とても罪深いものに思えて

しまうのだ。
考えても仕方のない仮定の話だ。今は確かにここにある。それでも――――それでも、考えずには、思い出さずにはいられないのだ。
なのはを失ってしまう、その恐怖でうちのめされたあのときを。
けれどそんなことは言えない。言えるわけがない。
しかし、なのははなおもつめよる姿勢を崩さない。

「本当に？　無理してない？」
「してないよ」
「じゃあ、どうしてそんなこと聞くの？」
「……ぼくは、なのはが笑ってるなら、しあわせだって思えるなら、それでいいんだよ」
「答えになってないよ。ユーノくん」

じいっと大きな瞳で見つめられてしまえば、ユーノに逃げ場はない。
とはいえ――――

「……ちょっと、自分勝手な落ち込みをね、してただけなんだよ。で、それってすごく情けない話だから」
「……」
「……あの、なのは。できればそんな眼で見ないでもらえるとありがたいんだけど」

なんだかいたたまれなくなったユーノだった。
しかしなのはは知っている。これでも五年いっしょにいるのだ。
それに、スクライア一族は別として、仲間内ではユーノと一番つきあいが長いのはなのはなのだ。
だから知っている。彼の責任感の強すぎるところも、一人でなにもかも抱え込んでしまうところも、他人を巻き込んでしまうことに

強い拒絶と罪悪感を持つところも。
たとえそれがユーノのせいではなくても、ほんの少しでも、ささやかなきっかけにしかなっていなくても、――それでも背負ってしまう、どこまでもやさしいところも。
そしてそれは、なのはに対しても例外ではなかった。が、それはなのはにとってはとてもおもしろくないことなのだった。

「あのね、ユーノくん」
「はい」

きびきびとした声に、ユーノは素直に返事をする。

「……何度も言うけど、これからも何度だって言うけど。もしかしたら、私の勘違いかもしれなくて、そしたら、それは謝るけど」
「？　……うん」
「私は、ユーノくんに逢えたこと、本当にうれしいって思ってるんだよ」
「……なのは」

完璧に図星を指されて、ユーノは苦笑する。そう、気づかれてしまえば、なのははこんなふうに言ってくれると思っていた。
けれど――

「……違うんだよ。なのは」
「逢わないほうがよかったなんて思ったこと、一度もないよ。……そりゃあ、ユーノくんにとっては……わからないけど」
「なのは」
「でもね、私は――」
「なのは。違うんだ」

強い声で言うと、なのはは黙り込む。少しだけ泣きそうになっている。
ユーノはやさしく笑った。
「違うんだよ、なのは。言っただろう？　自分勝手で情けない話なんだって。なのはが――――本当に、今の仕事に誇りをもって、やりがいを感じてやっているってことはわかってるよ。それに、魔法のおかげでフェイトやはやてや……まあ、クロノとも逢えた」
六つ上の黒髪のいやみな青年を思い出し、ユーノは少し口ごもる。
「だけど、なのはのしていることは少なからず危険を伴うことも確かで――――別にそれはなのはだけじゃないよね。クロノだってはやてだって、フェイトだってそうだ。だけど、なのはにきっかけを与えたのはぼくだから。それは変わらない厳然たる事実で、なのはがその先を自分の意思で選んだとしても……変わらないから。だから、たまにどうしようもなく、自分を責めたくなるんだよ。なのはが傷ついたり苦しんだり……そんな姿を見てしまうと、たとえ逢えなくても、魔法や危険とは関わりのないところで、しあわせに笑っていてほしいって。――――完全なぼくのエゴなんだよ、なのは。それでも、そう、思わずにはいられないんだ……」
願いも、祈りも、後悔も。
平和な場所で幸福でいてほしい。
ぼくといっしょに笑っていてほしい。
相反する欲望がうずまき、心を乱し、答えの出ない闇を生み出していく。
べち。
突然、頬に甘い痛みが走る。ユーノはきょとんと眼を瞬かせた。
どうやら、なのはに頬をはたかれたらしい。

うつむいているので表情は見えないが、なんとなく怒っているような気がする。

「……なのは？」
「ユーノくんはばかだよ」
「……うん。本当に」
「だいたい、寝不足で倒れたくらいでおおげさなの」
「……ごめん」
「それに、おかしいよ」
「え？」
「ないよ」
「……なのは……」
「今以上のしあわせなんて――――ユーノくんに出逢えなかったらつかめなかった、今以上のしあわせなんて、私にはないんだから」

語尾はふるえていて、ユーノは思わず、なのはの両手を握りしめる。
眼に涙を溜めて、なのははそれでも毅然と顔をあげて、笑った。
「ユーノくんに逢わなくても、私はちゃんとしあわせだったけど。ユーノくんに出逢って、もっともっとしあわせになったんだよ。だから……そんなふうに言わないで」

やさしい少女の心からの言葉に、ユーノはなんだかもうしわけなくなる。
そう、彼女なら――――こんなふうに言ってくれると知っていた。だから言いたくなかった。だから、閉じ込めたままでいようと思った。
だというのに、そんな決意さえ、彼女は簡単に看破してしまう。

「……うん。ごめんね」
「本当だよ」
「ごめん」
「……」
「ありがとう。なのは」
「……うん」

二人は顔を見合わせる。なのはの涙を手を伸ばして拭いてやると、なのははきゅうっと目を閉じた。
くすり、と、笑みがこぼれたのは同時だった。
そのあとはくすくすと笑い合う。

「なんだかなあ」
「え？」
「本当は、ぼくが怒る予定だったんだよ。なのはに、無理しすぎだって」
「そんなの、ユーノくんには言う資格ないよ。えーと、馬車馬のように働いてるくせに」
「……それ、クロノの受け売りだね？」
「あれ、どうしてわかったの？」
「わかるよ……」

そんな二人をささやかに見守っている者たちがいた。
フェイト、はやて、クロノ、エイミィの四人である。

「……なんか、世界は二人だけのためにある！って雰囲気だよねえ……」

エイミィがとっくりと二人を観察しながら言うと、はやてはうんうんと頷く。

「大好き、愛してるって告白しあったようなものやんなあ。でも、つきあってはないんやろ？　不思議や」

「……まあ、二人には二人のペースがあるから……」

フェイトが困ったようにフォローを入れる。

「というか、入らないなら帰らないか。だいたい、まだみんな仕事が……」

「なにゆうてんねんクロノくん。仕事よりこっちのが大事や」

「そうだよクロノくん。あの二人、ほんっとに全然進展しないんだから……。気を利かせて二人きりにしてあげた分、成果は出してもらわなくちゃ！」

エイミィとはやての物言いに、クロノとフェイトは顔を見合わせる。

そんなこと言われても……。

二人の性格を熟知しているだけに、今日はもうこれ以上進展しないことはわかりきっているではないか。

が、二人にはそんなことはどうでもいいらしい。

そんな視線には全く気づかないまま、ユーノとなのははまだ笑っていた。

番外編「幸福の意味」（後書き）

ユーノとなのははいつも、仲間内からほほえましく見守られています。ラブラブです。これでつきあってないとか世の中ナメてます。幼馴染っていいですよね！（何回言うんだ）次から本編再開します。恋人同士になった二人のこれから。

「はじめまして、恋人。」（前書き）

恋人同士になったふたりだが、それぞれ忙しくて、もう一週間、声も訊いていなかった。いままでは平気だったはずのその時間が、それぞれに、重くのしかかる。「逢いたい」――――ただのわがままな気持ち。けれどもう、押しつけてもいいはずの、気持ち。

「はじめまして、恋人。」

ユーノ・スクライアは限界だった。

『ユーノ。追加だ』

「断る！」

腐れ縁（本当に腐っている気がする。根っこまで）であるクロノ・ハラウオン提督の資料請求を即答ではねのけてしまうくらいには。

ちなみに普段ならば、いやみのひとつふたつみっつくらいは言うものの、きちんと引き受けるのである。仕事なのだから。ユーノは、公私混同はしない主義なのだ。

しかし――――である。そう、「しかし」がつくのだ。

ユーノは画面に映る不満そうなクロノをねめつけた。

「追加、追加、追加って、僕を過労死させる気か、君は！　今日だけで二度目だぞ！」

ちなみにここ一週間では通算十二回目である。

クロノはユーノの、怒りと怨みのこもった射抜くような視線にびくりともしない。

「このくらいでギブアップなんて、情けないな」

だったら代わってみやがれ、と、ユーノは心の中で反論した。

「このくらい」のおかげで、ユーノは一週間宿舎にも帰れていないのだ。睡眠時間は一日平均二時間を切っている。

「仕方ないだろう。どれも火急の案件なんだ。君以外に、期日以内に片づけられる人がいるのなら、紹介してくれないかい？」

ユーノはがんがんと響く頭を押さえながら、むっつりと黙り込む。

答えは「否」だったからだ。

ユーノは一見「どこにでもいるぽややんとした少しぬけた青年」（クロノ談）だが、時空管理局無限書庫司書長なのである。その肩書きは、無論伊達ではなかった。

多彩な検索魔法を駆使した情報探査・処理能力において、ユーノより優れている人間は、少なくとも時空管理局内には存在しなかった。

そして、その優秀すぎるユーノの思考回路は、小憎らしいことに既に結論を出しているのだった。すなわち、クロノの依頼は受けねばならない、という、真に嘆かわしい結論を。

そんなことは、クロノから通信が入った時点でわかっていた。わかっていても、無駄な抵抗を試みたくなってしまうほど、今日のユーノは追いつめられていたのだった。

大きなためいきをひとつついて、ユーノは力なくつぶやいた。

「……詳細をメールで送ってくれ」

『期日は三日以内だ。遅れないように頼む』

怒りに身を任せ、返事をせずに通信をぶったぎったのは言うまでもない。

ユーノ・スクライアは限界だった。

それは、実は仕事についてではなかった。超過勤務は日常茶飯事だし、仕事にやりがいと誇りを感じてもいたから、苦痛を感じることもなかった。……遠慮を知らない昔なじみの態度に腹を立てることはあっても。

限界なのは、別の事柄についてであった。ユーノは一人の少女を頭に思い浮かべる。

栗色の長い髪。くるんとした大きな眸。「にゃはは」と笑う、ちょっと気の抜けた笑い声。

その作業は眼をつぶったり、呼吸をするのと同じくらい、ユーノにとっては簡単な作業だった。

少女の名を高町なのはといい、つい先日、思いを通わせたばかりの———つまりはなりたてほやほやの恋人である。

ユーノはこの一週間、彼女の声さえまともに聞いていなかった。お互いに多忙なのは今に始まったことではないし、一週間会えないなど、別に珍しいことではないのに、ユーノにとって、今回は耐えがたい苦行であった。

理由を、頼んでもいないのに、ユーノの思考は勝手に導き出してくれる。考えたくなくても考えてしまい、そしてその身勝手な結論に、ユーノは己の愚かしさにうんざりしつつも、「逢いたい」という衝動を抑えられないのである。

おかげで仕事にも集中できない———とは言わないが、余計な神経を使うので、疲労度はさらに倍だった。

（……なのはも、仕事、がんばってるんだろうな……）

管理局の切り札。

エースオブエースの名を冠す、管理局最強の魔導師であるユーノの恋人は、勤勉で真面目だから、こうしてユーノが腐っている間も、せっせと任務をこなしているのだろう。

そう考えると、自分も頑張らねば、と気合が入るのと同時に、感

じてはいけない焦燥が身を襲う。
心の狭さに、つくづく自分がいやになる。
ユーノはぶんぶんと頭をふって、目の前の仕事に専念することを決意した。

同時刻、高町なのははぼんやりと空を眺めていた。今日はデスクワークだったのだが、どうにも集中できないので、一息ついているのである。
空は憎らしいほどの晴天で、大好きな色のはずなのに、心は沈んだままだった。
屋上の無機質なコンクリートの上に寝っころがって、なのははその理由である一人の青年を思い浮かべた。
亜麻色の長い髪には、なのはとおそろいの緑のリボンが結ばれている。
深い翡翠の瞳は、いつでも穏やかで優しい光を浮かべていて。
頼りなさそうに見えると人は言うけど、なのはにとっては、誰よりも信頼できる、たった一人の男の人。
――――に。

（……もう一週間も逢えてない……）

その事実をあらためてつきつけられ、なのははさらに気分が重くなった。
一週間逢えないくらいなんだというのだろう。
今まで、もっと長い間予定が合わなくて逢えなかったことは何度もあったというのに。
それでも、今だけは、と思う。

今だけは、早く早くと、気持ちが急かすのだ。
――――「今」が夢でないことを、この身にきざみつけるために。
そう、ただのわがままだと、わかっているから。

ただのわがままでも、たぶん、ぶつけていい関係になれたから。

ユーノとなのはが恋人同士になったのは、一週間前のことだった。
些細な誤解とすれちがいは解消され、気持ちを確かめあい、受けいれあった。
「大切な友人」というお互いの感情は、真実をやさしく包んでいただけであり、二人はもうずいぶん前から、お互いを特別な存在として認知していたのだ。
相手も自分と同じだったとわかったとき、なのはは、思いが通じ合った瞬間と同じくらいうれしかった。
けれどその余韻にひたる間もなく、ユーノは仕事の日々に忙殺されており、その日から一度も逢っていない、という今の状況に至るわけである。
恋人同士としては初々しくても、幼馴染としてユーノのことを理解しているなのはとしては、連絡が来ない理由も繋がらない理由もすぐに察知することができた。
クロノに確認を取ったところ、その予測は間違ってはいなかった。

（……だから、我慢、しようと思ったのに……）

簡単なことだ。ユーノに余裕ができるまで待てばいい。
今までだってできた。さびしいけれど、しかたのないことなのだ

から。
一日、二日と、ゆっくりと時は過ぎて、なのはの心を蝕んでいく。
あの幸福な時間が愛しければ愛しいほど、遠くに感じた。
不安と、孤独と、やりきれなさが広がっていく。
「好き」という心だけが色あせなくて、弱い自分を叱咤する。
なのははぱん、と強く両頬をたたいて、勢いよく立ち上がった。
くよくよしていても始まらない。とりあえずは、やるべきことをやるしかないのだった。
そしてそれから、無限書庫に、処方箋をもらいにいこう。

「スクライア司書長でしたら、所用で席を外しておりますが」
「……そうですか。失礼しました」

受付の局員のその言葉は、なのはに予想以上の衝撃を与えた。
必死で平静をとりつくろって、無限書庫をあとにしたなのはは、ふらふらと前後不覚になりながら廊下を歩いていた。
壁にもたれて、盛大に息をはく。
なんということだろう。「もうすぐ逢える」と上昇中だった心が一気にしぼんでしまった。

（……忙しい。忙しいんだから、しかたない……のよね。わかってるけど……）

ほんの少し、顔が見られるだけでもよかったのだ。
できれば、話もしたかったけれど。
できれば――――ちょっとだけ、抱きしめてほしかったりもしたけれど。

忙しいのなら、無理は言いたくないし、させたくないから。
それでも最低限、顔くらいは、見られると思ったのだ。
と、いうのに。

「なのは？　どうしたの？」

聞きなれた言葉に顔をあげると、フェイト・テスタロッサ・ハラウオン――ユーノが過労死しかねない原因の義妹――が、心配そうになのはをのぞきこんでいる。
親友である彼女に、なのはは力なく笑ってみせた。

「ううん。なんでも……ないわけじゃないけど。大丈夫」
「……そう？」
「うん。……あ、でも、ひとつだけ。ユーノくん、どこにいるか知らない？」

藁にもすがる思いで聞いてみるが、フェイトはもうしわけなさそうに首を横にふった。

「無限書庫にいないなら、わからない。……ごめんね、なのは。ユーノが忙しいのは、クロノが仕事を頼んでるせいなんだ。クロノ、今抱えてる事件が、いろいろと情報不足で手間取ってるらしくて……。クロノの無茶苦茶な要求に応えられるの、ユーノくらいだから……」
「ううん。フェイトちゃんが謝ることないよ。それに、クロノくんのせいでもない。仕事なんだもの。クロノくんだって、大変そうにかけずりまわってるの、知ってるもの」
「……なのは」
「大丈夫だよ。フェイトちゃん。でも、ありがとう」

心配をかけさせないように笑ってみせて――それでも、フェイトは心配してしまうだろうけれど――なのははフェイトと別れた。

そのほんの少し前、ユーノは用事をすませて、ぐったりと肩を落として局の廊下を歩いていた。いいかげん、限界かもしれなかった。
いや、限界はとっくに来ていたのだが。
なのはに逢いたいという感情は、もう理性ではコントロールできないほどふくれあがっていた。

（この案件は今日中に始末するとして……バックアップは司書に任せよう。で、まだ三件あるのか……。並行してすすめてはいるけど、最低でも二日はかかるだろうな……。うまくヒットしてくれればいいけど、クロノの案件は、たいていヒットしすぎるかまったくヒットしないかどっちかだから……。それでどうせ、その間にクロノは新しい案件を山積み持ってくるんだろう……たぶん、あと一週間はそれのくりかえしか……）

つまり、あと一週間はなのはに逢いにいけない。
ユーノはくらくらと気の遠くなる思いがした。
同時に、どこかで少し安心する。
ふくれあがった感情は、そう、ユーノにもコントロールできないのだから。
逢ってにこやかに談笑して――なんて、理想だが、できるわけがない。いや、そうしたいのはやまやまだが、たぶん、できない。もう少し乱暴に、なのはを求めてしまうと思う。――以前、寝ぼけてキスをしたときのように。
そうしたら、なのはを怖がらせてしまうだろう。もしかしたら嫌

われてしまうかも。
それは、想像するだけでも恐ろしいことだった。
気持ちが自然におさまるまで、逢わないほうが無難なのかもしれない。おさまるならの話だが。

（不毛すぎる……。僕って、どうしてこう――なんかなのはの幻が見えるし。末期かな）

目の前で大きな眼がぱちくりと開いている。
リアリティのある幻だな、と、ユーノはくすりと笑った。
大きな瞳がゆらめいて、ユーノの姿を映す――

（幻――じゃない！）

手を伸ばして、きちんと触れられることがわかった瞬間、ユーノはそのままなのはの手をひきよせて、とっさに手近にあったドアノブをまわした。
がちゃん、とドアが閉まる音と、かすかな息づかいだけが空間を支配する。
腕の中のやわらかな感触と、確かに伝わる体温が、それが現実であることをユーノに告げる。しばらくは、その感覚に身を任せていたかった。
一方のなのはは、おそるおそるユーノの服の裾に手を伸ばしていた。きゅう、と掴む。感触が、「今」が嘘ではないと教えてくれた。
あふれでるはずのたくさんの言葉が一瞬でかききえ、ただユーノのぬくもりに包まれる。
数秒後――数十秒後かもしれなかった、永遠にも似た時間の後、ユーノはふと我に返る。

「――わあ、ごめん！」

そしてあわててなのはから離れて、びたんと壁にはりついた。
なのはは少し物足りなかったが、あまりの慌てようがおかしくて、ついくすくすと笑ってしまう。
謝ることなどなにもないというのに。

「えーと……。久しぶりだね、なのは」

ユーノはもごもごと口を開く。
ぼさぼさの髪。きっと、とても、忙しいのに。———なのはのことを考えていてくれたのだろう。
それだけで顔がほころぶ。

「うん」
「……外、出る？」
「……ううん。もうちょっと、一緒にいたいな」

なのはの言葉に、ユーノは照れつつも笑って頷いた。
同じ気持ちだったことがうれしかった。
一方通行ではないことが———たぶん、相手も同じくらい、自分に逢いたいと思ってくれていたことがわかって、うれしかった。
ぱちっと眼が合って見つめあえば、不安になっていた自分が、焦っていた心が、簡単に消えていくのがわかる。
「へへ」と笑いあって、おずおずと手を伸ばした。
触れる。ゆっくりと、抱きしめる。
それだけでよかった。ほかになにもいらなかった。———心からそう思うことができた。

壁に背中をもたれて、ふたりは隣り合って笑う。その距離は、いつもより近かった。
肩と肩が触れる距離。

「元気だった？」
「うん。ユーノくんは、疲れてる？」
「ちょっとね。でも、大丈夫だよ」

それは嘘ではなかった。
我ながら単純だと思うが、なのはに逢えたことで、ついさっきまでの疲労感が嘘のように、心は晴れやかだ。

「……あの、ユーノくん」

なのはがもじもじと手を合わせて、上目遣いでユーノを見つめる。
ユーノが首をかしげて「うん？」とほほえむと、さらにもじもじと頬を赤く染める。

「なのは？」

具合でも悪いのだろうか。
心配になるが、なのははさらにもじもじと口ごもる。

「あのね、えーと。その……」
「うん」
「……だ、抱きつきたい。だめ？」
「！」

耳まで真っ赤になりながらもお願いをするなのはに、ユーノはく

らくらとめまいがしそうだった。

（……かわいすぎる）

と思わず思ってしまったのは、惚気ではないと思う。……たぶん。

こんななのはを他の誰にも見せられないと思ったのは、独占欲かもしれないが。

ユーノは視線を泳がせてから、負けないくらい真っ赤になって頷いた。

「……どうぞ」

ぱちりと眼が合って、お互いの真っ赤な顔に、同時にくすりと吹きだした。

抱きしめたのか、抱きついたのか、曖昧なまま。

二人の距離はゼロになる。

なのははぎゅうっとユーノの胸に顔をうずめて、しあわせそうに頬をゆるませる。

ユーノは幸福に身をゆだねながら、心の波が静かに凪いでいくのを感じていた。

逢えたら、もしも、逢ってしまったら、どうなってしまうんだろうと思った。

きみに餓えている獣のようなぼくに、もしかしたらきみは怯えてしまうかもしれない。

嫌われてしまうかもしれない。

けれど今、きみはぼくの腕の中にいて。

ぼくは何度も確認する。

そして笑ってしまうんだ。

ああ、ぼくの中の御しがたい獣でさえ、きみにはかなわないのだと。
笑ってしまうんだ。

「ユーノくん」
「……うん」
「……あのね。大好き」
「うん――――」

新しい二人はとてもたどたどしくて、もどかしくて。
簡単なことが、単純なことが、見えなくなって不安になる。
ゆっくりはじまっていけばいい。
一人ではないのなら。
抱きしめてくれる腕があるのなら。
繋がれた手のぬくもりがあるのなら。
決して後悔せずに、前にすすんでいけるのだろう。

はじめまして。
そしてこれからも、どうぞよろしく。
たったひとりのひとへ。

「はじめまして、恋人。」（後書き）

本編再開です。まあ基本、読み切り形式でいくので、どっから読んでも大丈夫な感じですが。徐々に甘く甘く甘くなっていく予定です。もうじゅうぶん甘い？（笑）ユーノもなのはも忙しそうなポジションですよね。

星の数ほどのキスを（前書き）

晴れて両思い、恋人同士になったが、なのはの悩みは尽きない。しあわせ。だけど、どうして？

星の数ほどのキスを

それは、なのはが七度目のため息をついたときのことだった。
目の前のスープをくるくると意味もなく混ぜながら、なにやら考えこんでいるなのはを見て、はやてとフェイトはお互いに顔を見合わせ、そしてこっくりと頷き合った。
そして、声をそろえて言ったのである。

「なのは、ユーノとなにかあったの？」
「なのはちゃん、ユーノくんとなにかあったん？」

ぴた、と、なのはの手が止まる。

（図星か……やっぱり）

二人は苦笑しながらも納得する。
自覚があるのかないのか、つきあう前もつきあうようになってからも、なのははユーノのことになると感情を隠せないのだ。
仕事でどんなに辛いことがあっても完璧に笑えるというのに。まあ、それもユーノだけには通じないのだが。
――――だからかもしれない、と、二人は思った。
ユーノの前では、ユーノにだけは、なにも隠せないなのはだから。ユーノのことだけは、心のどこかで無意識に、偽りたくないと願っているのかもしれない。
なのははむう、と口ごもる。どうやら、相当言いにくいことらしい。

「けんかでもしたん？」
「ううん。ユーノくん、やさしいから」
「じゃあ、最近ずっと逢えてないとか」
「ううん。忙しいときでも、逢える時間つくってくれるよ。どうしてもだめなときだって、電話くれるし」

惚気しか聞こえてこないが、ではなにに悩んでいるというのだろう。

二人は頭を抱えて、テレパシーで会話をする。

（ほかって、なにかある？）
（うーん。ありきたりなところでは浮気……とかやけど）
（ユーノに限って？）
（……ないなぁ）

どこまでも真面目で誠実な青年の顔を、二人は思い浮かべる。

……ありえない。

ユーノがどれだけなのはを大切に思っているかを知っている。それでももしも、なのはより大切にしたい女性が万一でもあらわれたとしたら――それこそありえないが――きっとユーノは、全てを包み隠さず、なのはに打ちあけるだろう。

それで、なのはをどれだけ傷つけることになっても、不器用な彼は、なのはには決して嘘をつけないだろうから。なのはがそうであるように。

（……わからんなぁ）
（私たち、恋愛経験、ほぼないに等しいしね……）
（否定できへんな……）

二人が心の中で深いため息をついたとき、なのはがぐっとなにか

を決意して顔をあげる。

「あのね、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん」

「なんや？」

自然と二人も真剣になる。

しかし入った気合いは、次のなのはの一言によってぷしゅう、と抜けてしまうことになるのだった。

「私って、可愛くない？」

『……は？』

「ううん、じゃなくて――――魅力ない？　その……そう、一人の女として」

あまりに予想外の質問だったので、二人はしばらく声も出なかった。

しばしの沈黙の後――――なのははしょんぼりと肩を落として席を立つ。

「……ごめんなさい。言いにくいこと聞いちゃって」

「わあ、ちょっと待った、待った、なのは！」

「ちゃうちゃう！　ちょっとびっくりしただけやって！」

二人は我に返ると、あわててなのはの腕を掴んで、もとの席に座らせる。

「なのはちゃんは可愛いで！　そらもう、ぶっちぎりや！」

「そ、そうだよ、なのは。うん！　なのはは、すっごく可愛いよ！」

なのははじいんと胸があたたかくなった。
同時に情けなくなってくる。

（二人にこんなに気を遣わせちゃうなんて……）

ということは、やっぱり、自分には女性としての魅力が今ひとつ足りないのかもしれない。……考えてみれば、思い当たる節がたくさんある。
ありすぎて困るほどだ。
管理局の白い悪魔と呼ばれ。
エースオブエースの名を冠し。
魔導師スキルはニアエスランク。
……可愛げがまったくない。
なにやらぶつぶつと考えこんで落ちこんでいるなのはに、二人はおろおろしながら話しかける。

「な、なのはちゃん？」
「なのは？」
「……やっぱり、だからなのかなあ……」
「……なにが？」
「ううん……もういいの……よくわかったから……」
「あの、なのは、なにか誤解———」
「ごめんね、二人とも」

なのははしっかりと二人の手を握りしめて、にこりと笑った。
「変なこと聞いちゃったけど、全部忘れてくれていいからね。気を遣わせちゃってごめんなさい。でも、すごくうれしかったよ」
それだけ言うと、てててて、と走っていってしまう。

あまりの出来事に、二人は呆然と見送ることしかできなかったのであった。

なのはは、そのままてとてとと走って無限書庫へと向かった。
その一角に備えられている司書長室にひょこっと顔をのぞかせると、なのはの逢いたかった人はソファですやすやと寝息を立てていた。
どうやら、本を読んだまま眠ってしまったらしい。とても彼らしくて、なのはは思わず微笑む。
じっと、なのはは自分の恋人――――ユーノの顔をのぞきこんだ。
なのはの大好きな緑色の瞳はまぶたで見えないけれど、寝顔だけで心がふわふわとあたたかくなる。
不思議な人だ、と、思う。
この人にだけは、なのはは嘘をつけない。
問いつめることも、責めることもしないのに、どうしてだろう？
ただ穏やかに、春の陽だまりのように、笑ってそばにいてくれるだけで――――
昔も、今も、変わらない。
出逢った時からずっと、変わらない。
変わってしまったのは、きっと……。
指先で、やわらかな頬に触れる。

「……ユーノくん」

あどけない寝顔。
……寝ているなら、聞こえないなら。
ユーノにさえ言えなかった言葉を。

決して偽れはしないから、黙っていることしかできなかった心を。
ただのわがままで、自分勝手な独り言。

「――キスして……」

思いが通じて。
いっしょにいて、話をして、笑って。
それはすごく楽しくて、うれしくて、しあわせで。
でもどうして？
どんどんよくばりになっていく。
「もっと」って、思ってしまう自分がいやで。
でも止められない。
おかしいね。
「好き」って言葉がもらえただけで、それで充分だったはずなのに。

「……ごめんね」

こんなんじゃ、いつか、嫌われちゃうかな……。
そうしたら、そうしたら、どうしよう。
やだな……。

「……なのは？」

予想外の声がして、なのははがばっと顔をあげた。
誰かなど、考える必要もない。
この部屋にいるのは、なのはのほかにはもう一人だけなのだから。
翠玉の瞳がゆれて、なのはを映していた。

「ユーノく――」

「……なの……」
「きゃあああっ！」

驚愕のあまりきびすをかえして逃げようとしたなのはを、ユーノは反射的に後ろから抱きしめて捕まえる。
強い男の力で捕らえられ、なのははそれ以上逃げることができなかった。恥ずかしさのあまり、ユーノの顔が見れない。
なのはは真っ赤になって涙をこらえた。
ユーノがなにも言わないでなのはを抱きしめたまま、沈黙が訪れる。
せめてなにか言ってくれれば、とも思うが、それはそれで怖い。

「……ひとりごと聞くなんて、ずるい……」

やっとのことで漏らした言葉に、ユーノはぱちくりと眼を瞬かせる。
一瞬間を置いて、思わず「ぷっ」と吹き出してしまったユーノに、なのははがんっとショックを受けた。
再び暴れだす。

「うわあん、離してええええ！」
「わあ、ちょっ……なのは、暴れないで」
「ど、どうせ、どうせ、おかしいもん。笑えばいいじゃない。でも、笑うなら一人で笑ってよー！　ユーノくんのばかあああ！　私がどれだけ恥ずかしいかわからないくせにー！」

じんわりと涙がこみあげる。
なんだか、くやしい。
ううん、かなしい。
そうじゃなくて、もっと———さびしい。

そう、さびしいのだ。
なのはばかりが、ユーノを追いかけている気がする。
好きだと思っている気がする。
なのはばかり――――ユーノより、たくさん。
そんなのは、さびしい。
ただのわがままでも、ずるくても、勝手でもいいから。
一緒に真っ赤になって、一緒におろおろしたかった。
そんなことを考えてしまえば、こらえていた涙を止められるわけもなく、なのははごしごしと眼をこする。

「なのは？　……泣いてるの？」
「……ユーノくんは悪くないの。ごめんなさい。すぐに、泣きやむから……」

落ち着いてしまえばけんかもできない。
ユーノの腕の中はあたたかくて、どんなときでも、なのはを受け入れてしまうから。
「離して」なんて嘘。
ずっと、ずっと、抱きしめていて。

「……なのは？　こっちを向いて」

静かでやさしいユーノの声に、思わず頷きかけるが、羞恥心のほうが勝った。

「……まだ、やだ」
「どうしても？」
「……うん」
「……わかった」

同時に、ちゅ、と音がする。

（へ？）

首筋に生温かい感触。ぎゅうっと、抱きしめる腕に力がこもる。

「ユ、ユーノく――――ひゃあっ！」

今度はぺろりと舐められて、身体中がしびれる。

（な、ななな、なに？　なに？　なに？）

ふと力がゆるまったので、なのははふりむいた。

「ユーノくん」と言おうとした唇を、そのままふさがれる。

驚く間もなく、そのまま床に押し倒された。

両手を絡みとられる。

なのはの好きな翡翠の色は見えない。

けれど、唇から伝わる熱が、身体にかかる重みが、吐息が。

苦しくて、苦しくて、熱かった。

唇が離れて、瞳がぶつかりあう。

言葉を許さないまま、再び重なる。

逃げることも、抗うことも、名前を呼ぶこともできずに、なのははただ受け入れる。

何度も、何度も、何度も、深くて熱いキスがふってきて。

最後に額に軽くくちづけると、ユーノはなのはをじっと見つめて、くすりとほほえんだ。

「！」

なのははかっと熱くなる。

「ユーノくん！」
「うん？」
にこにことユーノは笑っている。
「あうあうあう」と、なのはは言葉にならない。
なんだかとてもくやしい。そう、なにかが圧倒的に負けている、と思った。
効果はないとわかっていても、睨みつけずにはいられない。
「……ずるい。ユーノくん」
それだけ言うのが精一杯だった。
ユーノはきょとんとして、また笑う。
「なのはが言ったんじゃないか」
「い、いい、言ったけど！　でも、いきなり……！」
「いきなりじゃないよ」
「え？」
あっさりと言って、ユーノはよいしょと腰をあげる。
そういえば、押し倒されたままだったのだ。
なのはを促して、隣同士にソファに座りなおしてから、ユーノは穏やかに笑ってなのはの頬を撫でる。
「———ずっと、キスしたかったよ。僕も」
「……うそ」
見つめられると、そのまま身体が石化してしまいそうだったので、なのはは目を伏せる。

「うそじゃないよ。でも……」
「でも？」
「……また、なのはを泣かせたくなかったんだ」

あのときのように。
言外の言葉に、なのはは思い当たる。
前に、ユーノが寝ぼけてなのはにキスをしたとき、そう、なのはは泣いてしまったのだ。
キスがうれしくて、けれど、そこにユーノの心がないことが哀しくて。

「正確には、泣かせて、また自分が傷つくのがいやだった……のかな。我ながら臆病者というか、卑怯者というか」
「……ばか」
「うん。本当に」

こつん、と、額が触れ合う。

「だから、うれしかった。うれしくて、なのはが可愛くて、笑っちゃったんだけど」
「……可愛くないもん」
「可愛いよ」
「……」
「なのはは、世界で一番可愛い」

臆面もなく言われて、なのははぼんっと顔を赤く染める。

（……ユーノくんって、どうしてこういうことをさらっと言えちゃ

うのかしら……）

黙ってしまったなのはに、ユーノは苦笑する。

「キス、いやだった？」

我ながら意地悪な質問である。

答えがわかっていて、でも言わせたくて。

下を向いたまま、なのははぷるぷると首を横にふった。

「じゃあ、もう一回してもいい？」

「……もう、いっぱいしたよ」

「うん。でも、もっと」

ユーノの長い指が、頬をなぞって、つう、と首筋まで降りてくる。

びくん、と、なのはの肩がふるえる。

そのままひきよせて、なのはのやわらかなまぶたにキスを落とす。

あまりにも自然な流れに、それでもいやだと言えない――言いたくない自分がくやしくて、なのははぱっとユーノの唇を自分の手でふさぐ。

「ま、まだ、いいって言ってない」

ユーノはおもしろそうに笑って、空いている左手で、口をふさいでるなのはの手を取ってくちづける。

「！」

へにゃ、と力がぬけてしまったなのはの手をそのままひきよせて、ぽすっと抱きしめた。

「だめ？」

耳元に唇を寄せてささやけば、なのはは頭の中が沸騰しそうになる。

「……ユーノくん！」
「うん」
「……遊んでるでしょ」
「そんなことないよ」
「うそ！」
「信用ないなあ。うれしいだけだよ」
「――――ずるい！」

逆らえない甘い言葉。
抗えないやさしい抱擁。
逃げられない甘いキス。
うそつき。
ずるい。
全部、わかってるくせに。
逆らえない？
逆らいたくない。
抗えない？
抗いたくない。
逃げられない？
――――逃げたくない。

聞かないで。
答えなんてひとつなのに。

ユーノの広い背中に腕をまわして、抱きしめる。
そっと顔が離れて、見つめあった。
やさしげで、おだやかで――――でも、とてもうれしそうな、笑顔。

（……ずるい）

伝わる気持ち。
「好き」という気持ち。
同じだとわかってしまうから。
一方通行ではないと、ひとりよがりではないと、なのははわかって、しあわせになってしまうから。

「……キスして」

小さな言葉を受けとめて。
ユーノは心からのキスを贈った。

星の数ほどのキスを（後書き）

ユーノ、腹黒。……あれ？　いやでも、頭がいい＝賢しいっていうか、こう……アレですよね。自分だけで結論出しちゃって、結果的に相手を傷つけるみたいな。ユーノってそんなタイプ。基本的に、私の書くユーノはちょっと腹黒いというか、攻めるときは攻めます。なのはは基本的に女の子してます。

きみが眠れない夜は（前書き）

夜中に目が醒めた。届かない、小さな小さな、無力な手のひら。――ごめんなさい。それでも私は、あなたに逢いたい……。

きみが眠れない夜は

伸ばされるたくさんの手に。
手を伸ばす。
名前を呼んで。
お願い、あきらめないで。
届いて。
あきらめないで。
無理だなんて言わないで。
どうして――――

どうして、私の手は。
なにも掴めないの？

こぼれおちていく、砕いてはいけないたくさんの欠片。
泣いても、泣いても、泣いても。
意味などない。
偽善にもなりはしない。
なんの救いにも。
ならばどうして、心は傷つき、涙を流すのだろう。
そんな資格などないのに。

『――――助けて』

おねがい、たすけて――――

びくりと身体がふるえて、眼が覚める。
なのはは真っ暗な天井を見上げて、小さくため息をついた。
身体中にびっしょりと汗をかいている。自分の弱さに情けなくなって、なのはは息を吐いた。むっくりと上半身を起き上がらせると、身体が重い。
時間は夜中の二時を指していた。
こんな時間に眼が醒めてしまうなんて。きちんと睡眠をとらなければ、疲れがとれないのに。
冷たい水を飲んでも、ベランダに出て空気を吸っても、気持ちはふるえたまま。どうにも落ちつかなくて、なのはは所在なく、自らの身体を抱きしめる。
いくつもの手が、暗闇からなのはに向かって助けの手を伸ばしている。
なのはは必死に手を伸ばす。
助けたい。この手が、もっと、もっと、先まで。
伸ばすのに、届かない。
届かないまま、嗚咽と、叫びと、泣き声だけが響いて。
手は闇に呑まれ、なのはは動けないまま、立ち尽くす。
手を、伸ばす。
届かない手を。
何度も。
何度も。
何度も。

届かない手を。

「……寒い」

凍えた空には、銀色の三日月が浮かんでいた。

ふと時計を見ると、時刻は深夜の三時を過ぎていた。

（もうこんな時間か）

ユーノはモニターを閉じて、うーんと伸びをする。

肩がこきこきと鳴るが、心地よい疲労感だった。今度発表する予定の論文がほぼ書き終わったのだ。あとは推敲して、直しを入れるだけである。夜中でなければ、祝杯をあげたい気分だ。

最後までやってしまおうか、という考えが頭をよぎるが、すぐに「やめておこう」と結論が出る。

無理をすると、泣いたり、怒ったりして心配する恋人がいるのである。ユーノに言わせれば、その恋人のほうもたいがい無理しすぎな気はするのだが。

ユーノのことを「やさしい」と彼女は言うけれど、そんなことはない、と、ユーノ自身は思う。やさしすぎて、なんでも背負ってしまうのは彼女のほうだ。

素直に泣くこともできず、忘れることもできず、笑顔の奥で血を流しながら、それでも、手を差し伸べ続ける。だれよりも強く、だれにでもやさしくあろうとする。

その手に、今まで一体どれほどの人が救われてきたのだろう。

――ユーノのように。

人は万能ではないから、完全ではありえないから。

手が届かないときもある。

間に合わないときもある。

彼女は、その痛みを、傷を、思いを、後悔を、すべて背負ってしまうけれど。

そしてそれは、誰にも――ユーノにも止めることはできなくて。

たとえどんなに、「もういいよ」と言いたくても、ユーノにできることはそんなことではなくて、ユーノが彼女にできる、唯一のことは。

（……無力、だよなあ。僕）

はあ、と深いためいきをついてから、ユーノはぶんぶんと頭をふって思考を切り替える。

なのはのことになると「心配性」になってしまうのは悪い癖だ。

こういうときはとっとと寝てしまうに限る、と、ユーノが立ち上がったとき、インターフォンが鳴った。

「？」

こんな時間に来客？

ユーノは訝しげにインターフォンの画面を覗きこみ――――あわてドアを開ける。

「なのは！　どうし――――」

開けた瞬間、なのはは何も言わずにユーノの胸に飛びこんできた。

ユーノはひととおり驚いたあと、なのはの背中に腕をまわすと、ドアを閉める。

そしてそのまま、なのはをやさしく抱きしめた。

小さくふるえる肩。

冷え切った身体。

強くて脆い――――心。

なのはは泣いていなかった。

けれど、本当は泣いていることがユーノにはわかっていた。

ふるえがおさまり、なのはが小さく息を吐いてから、ユーノは顔

をあげたなのはの頬に軽くキスを落とす。

「……大丈夫？」

大きなガラス玉のような瞳を覗きこめば、ぐらりと中に映っている自分がゆれるのがわかった。

ぎゅう、と、ユーノの服の袖を掴んで、目を伏せる。

「……ごめんなさい」

「いいよ」

そろりと頭を撫でて、ユーノはやさしく言った。

なのはの「ごめんなさい」には、いろいろな意味がこめられているのだろう。

迷惑をかけてごめんなさい。

甘えてばかりでごめんなさい。

弱くて、ずるくて、ごめんなさい。

どうでもいいのに、と、思うけれど。

なのはにかけられる迷惑なら大歓迎なのに。

けれど、それでもきみは病んでしまうだろうから。

「いいよ」

言葉ひとつ。

伝われればいい。

伝わらなくてもいい。

少しでも、心の枷がはずれるのなら。

「怖い夢でも、見た？」
「……うん」

さりげなく尋ねると、なのはは素直に頷いた。
いつもの夢だと、ユーノには簡単に見当がつく。
なのはがこんなふうに、真っ青になって夜中に駆け込んでくるのは、実は今回が初めてではない。
いつからだろうか。
管理局に正式に勤めはじめてから、二年ほど経ったころからだろうか。
なのはは、ときおり夢に苛まれるようになった。
懺悔と悔恨の夢だ。
助けられなかった人々に、何度も何度も手を伸ばし、どうしても届かない夢。
大きすぎる災害や事件では、なのはが限界を超えて努力しても、間に合わずに命を落としてしまう人々が必ず出てしまう。
それは、なのはの責任ではない。
いちいち気にして後悔していたら、とても仕事など続けていられない。それに、なのはの手によって救われた命も、確かにある。なのはでなければ救えなかった命も――――確かにある。
それでもなのははすべてを忘れない。
忘れずに、背負って、抱えて、傷を包みこむ。
――――傷がこぼれて夢があらわれ、こらえきれなくなると、なのははユーノを頼ってしまうのだ。
耐えようと思うのに、これ以上甘えてはいけないと思うのに。
気づけば、ユーノの手のひらが、胸の中が恋しくて。
もう、ひとりではいられなくて。

どうしてそんなに、やさしいんだろう？

「……ユーノくん」
「うん？」

ユーノに抱きしめられながら、なのははまどろむ。
怖い夢を見て一緒に寝てもらうなんて、子どもみたいだと思う。
けれど、変わらない腕の中はとてもしあわせで。
ユーノの匂いでいっぱいになった部屋で、シーツにくるまれて。

「どうして、そんなにやさしいの？」
「え？」
「私、甘えてばかりで……情けないね」
「そんなことないよ」

ユーノは本心から言うのだが、なのははむう、と頬をふくらませる。
どうやら、納得していないようだ。

「だって、ユーノくんは甘えてくれない」
「甘えてるよ？」
「うそ」

即答である。
うーん、と、ユーノは考える。

「甘えてほしいの？」
「うん」
「うーん……。今のままでも、じゅうぶん甘えてるつもりなんだけど」
「うそだよ。私ばっかり」
「うそじゃないよ」

「じゃあ、どんなときに、私に甘えてるの？」

どんなとき、と言われても。

ユーノが返答に窮していると、「ほら、やっぱり」と、なのはがしがみついてくる。

「うそじゃないよ。甘えてるよ」

「たとえば？」

「たとえば……今とか」

「今は、私が甘えてるんだよ」

「なのはが甘えてくれて、僕はうれしくて、なのはに甘えてるの」

「……？」

なのはが「わからない」と首をかしげる。

その仕草が可愛くて、ユーノは戯れのキスを額にひとつこぼした。

くすぐったい、と、なのはが笑いながら身をよじる。

逃げる唇を追いかけて、ユーノはたくさんのキスを降らせる。

額に。

頬に。

鼻の頭に。

瞼の上に。

――――唇に。

なのははくすくす笑いながら、すべてのキスをうれしそうに受け入れた。

たまに、なのはのほうからキスをしながら。

やわらかなまどろみの中。

悪夢はもう眼を覚まさない。

この腕の中で、私は強さを手に入れる。

ずるくても、この手を手放したくない。

神さま。
私は卑怯者です。
なにとひきかえても、この人を失いたくないと願ってしまうから。

「……おやすみ」

くうくうと寝息をたてはじめたなのはのころんとした頭をやさしく撫でる。
あどけない、無防備な寝顔。
この笑顔を見ることができるのは、自分だけの特権だから。

『私に甘えてるの？』

……甘えてるよ。
きみが弱さを見せるとき、僕はそれを受け入れて。
誰にも見せたくないきみを閉じ込める。
僕だけが知っているきみを閉じ込める。
その涙も、傷跡も、笑顔も。
すべて、僕だけのものだから。
――――すべてをさらけだしてくれるきみに、僕は甘えてるんだよ。

やさしいのはきみ。
やさしくないのはぼく。
やさしくないぼくを暴いて、受け入れてくれるのはきみ。
信じなくてもいいよ。
怒ってもいいよ。
笑って、泣いて、眠って。
そうして明日は、強いきみに戻れるように。

きみが眠れない夜は、きみを抱きしめて眠ろう。

きみが眠れない夜は（後書き）

ちなみに、恋人同士になる前も、怖い夢を見たときは、添い寝をしてもらってました。仲良しですよね。まあ、おやすみのキスはありませんでしたけど。なのははとても優秀な魔導師で、天才だと思いますけど、だからこそ背負っているものも大きいのかなと思います。そんななのはを隣で支えるのはユーノであってほしい。と、そう願いたいです。フェイトは親友ですし、同じ痛みを抱えてると思うので、たぶん、頼れないんじゃないかなあとか。

月を追いかけて（前書き）

なのはを避けるユーノ。ユーノに避けられるなのは。ユーノは胸に潜む思いに苦しみ、なのはは焦燥する。シリアスに見せかけて、けっきょく甘い話です。

月を追いかけて

小さいころ、月がきれいで、捕まえてみたくて、追いかけたことがあった。
月のふもとはどこだろう？
そんな、ばかみたいなことを考えて。
追いかけても、追いかけても、追いつけなくて。
そのくせ、逃げても逃げても、ぴたりとうしろにいて。
私は手を伸ばす。

――――あなたに触れられたらいいのに。
おねがい。
もう逃げないで。
手の届かない月より、隣にいるあなたがいいの。

壊してしまいたい衝動をこらえる。
触れたいと願う自分を抑制する。
誰よりも大切にしたいきみなのに、ぐちゃぐちゃにしてみたいなんて。

「……情けない」

自室のベッドに転がったまま、ユーノは自己嫌悪のためいきをつ

いた。
カレンダーが目に入ると、無意識に日数を数えてしまう。
（……十日か）
なのはに逢わなくなって十日。
なのはに逢えなくなって十日。
なのはを避けるようになって十日。
なのはを――――
『そこのサボり魔。仕事だ』
容赦なく通信をつなげてきたのは、昔なじみの提督だった。
思考を中断されて、ユーノはぶすっとした顔で反論する。
「サボりじゃない。れっきとした休みだ」
『ほう。仕事がぎゅうぎゅうに詰まっているにもかかわらず、部下に全部押しつけて無理矢理有休を取った男の発言とは思えないな』
「やかましい！　たまりにたまりまくった有休を消化してどこが悪い！　とらなきゃとらないで文句言うくせに、本当に勝手だな、きみは！　だいたい、仕事が詰まってないときなんてないだろう。主にきみのせいで！」
かみつかんばかりのユーノの勢いにも、クロノは動じない。
『無限書庫は万年人手不足なんだ。いやなら人材育成に尽力しろ』
「そんな暇があるわけないだろう」
『負の連鎖だな。じゃあ仕方ない。あきらめろ』
「……」
『まあそれはいいとして、ユーノ、きみに聞きたいことがあるんだ

が』
「なんだよ」
やけっぱちな回答に、クロノはしかし容赦しなかった。
『なのはとなにがあったんだ？』
「……」
予想していた質問とはいえ、ユーノはとっさに二の句が告げなかった。
（この野郎……）
「なにかあったの？」ではなく、「あっただろう」でもなく、「なにがあったんだ？」と、疑問はすっとばして確信を持った質問である。
もちろん、答えは是である。
なのはと「なにかあった」からこそ、仕事に集中できず、このままではむしろ支障をきたしてしまうとの冷静な判断から――逃げたともいう――、多少の罪悪感はあるものの、有給休暇を脅迫に近い形で奪い取って、部屋に閉じこもって悶々と考えていたわけだ。
しかし。
（ここまで筒抜けっていうのもどうなんだ……）
情報源は、妻のエイミィ・ハラオウンであろう。現役を退いたとはいえ（しかも二児の母）、彼女の情報収集能力は尋常ではない。
ユーノは痛くなる頭を押さえながら、つとめて冷静にふるまった。
「……特に何も」

『ユーノ。あからさますぎる嘘はやめたまえ。見苦しい』
「みぐ……」
『最近、なのはの様子がおかしくてな。仕事は完璧なんだが、どうにも身が入っていないというか、気もそぞろというか。そこにいきなりお前が休暇をとれば、なにもないほうがおかしいだろう』
「それは――――」
『いいか。自覚がないようだから言っておくが、事は個人の問題ではないんだ。きみは無限書庫の司書長で、なのはは管理局の最強魔道士の一人。公私混同をするほどばかじゃないと信じてはいるが、万が一ということもある。人間、完璧ではないからな。どちらも管理局には必要不可欠な人材なんだ。ほら、ここまで誉めてやっているんだ。さっさと白状したまえ』

したまえじゃねーよ、と、普段温和な好青年は心の中で毒づいた。
誉めてる？
責任という言葉をていのいいいわけに使っているだけのような。

「なにもないよ。別にうそじゃなくて、本当になにもない」
『……ほほう？』
「心配・苦言はありがたく受けとめておくよ。……僕も、そろそろちゃんとなのはと話をしなくちゃいけないと思っていたから」

じいっとユーノの眼を見据えてから、クロノは「ふむ」と頷いた。
『まあ、そういうことなら今は何も言わないでおこう。では、仕事があるので失礼する』
「ああ」
『それから、さっき言っていた仕事の件だが、一週間で資料をまとめて僕のところに送ってくれ』
「おい！　だから、僕は休暇中――――！」

『きみ以外でこの案件を一週間以内に片づけられる者がいたら、その者に委任してもいい。いないとは思うが。じゃあな』

言いたいことだけ言って、クロノはぷつんと通信を切った。

あとには、メール受信のお知らせの点滅ランプだけが虚しく響いていた。

もちろん、ユーノ以外に条件を満たす者などいるわけないのだった。

なのはの顔をまともに見れなくなったのは、いつごろだったろうか。

無垢で、無邪気で、あどけないなのは。

そして、逢うたびに、きれいになっていくなのは。

恋人の欲目だろうか。

けれど蕾が花開くように、まっしろなキャンパスが色鮮やかに染められていくように、なのはは美しくなっていく。

ユーノはそんななのはに惹かれて――もちろん、外面の美しさだけで、なのはを好きになったわけではないけれども――手を伸ばす。

触れると、なのははうれしそうにはにかむ。

キスをすると、愛おしさで胸がいっぱいになる。

なのはを思う、この気持ちだけで、胸が満たされればいいのに。

けれど愛しさが募れば募るほど、いつか、なのはを壊してしまいそうな気がして。

どれだけ強くても、ユーノにとってなのはは、儚くて小さいたった一人の女の子だから。

自分の中の黒い欲望に気づいてしまったら、もう、なのはに触れなくなった。

自分よりもずっとずっと大切な人だから、近寄れなくなった。
そのことで、なのはが不安に思っている事も十分にわかっているのに。
正確に言うなら、なにかがあったわけじゃない。
「なにか」が起こらないために、逢わないようにしたのだ。
きちんと自分をコントロールできるようになるまでは逢えないと思った。
そして十日。
……たった十日だ。
なのに、気持ちはふくらむばかりで、自信もないのに、逢いたいという衝動に支配されていく。
なのはは、怒るだろうか。
泣くだろうか。
きっと今は———泣いている。
逆の立場だったら、泣かないまでも、とても落ち込んでしまうだろう。
だから———だから、逢いにいかなければいけない。
どんな形に終わっても。

ころん、と、転がる。
ころころと、ベッドの端まで転がって、ふたたび、もう一方の端に向かって転がる。
そんなことを延々とくりかえして、疲れたら、その場でためいきをついた。
悩みごとは、緑の眼の大好きな青年のことだった。
かれこれ、もう十日も逢っていない。電話も、メールもない。
十日ぐらい、すれちがいが多い日々の中で、めずらしいことでは

ない。
けれどどんなに忙しくても、ユーノはまめに連絡をくれたのだ。
……今までは。
最後に話をしたのも、直接ではなかった。音声だけの電話で、「しばらく逢えない」と言われただけだった。
理由を聞いても教えてくれなかった。けれどとても申しわけなさそうに「ごめん」と謝るから、ユーノから連絡が来るまで待とうと思ったのだ。
そしてゆっくりと十日がすぎた。
変わらない毎日の中で、ユーノだけがいなかった。
それがどんなにさびしいことか、なのはにはあらためるまでもなく、とっくにわかっている。
仕事のときは大丈夫なのに、笑っていられるのに、部屋に戻ってひとりになれば、涙がじんわりとあふれてきて。

（ユーノくんのばか）

心の中でなじってみても、きらいになんてなれるわけもなくて。
逢いたくて。
何度も逢いにいこうとして、ためらって、一歩が踏み出せなかった。
待つのはこんなに苦しい。
だから、早く。

たどりつけない月は、こんなにも冷たい。

『――――なのは。いるかな？』

突然入った通信の声に、なのははがばっと顔を上げる。
ごしごしと顔をこすってから、オンのボタンを押した。

「ユーノくん！」
『ごめん。寝てた？』
なのはは必死にふるふると首を横にふった。
画面に映っているのは、困ったように笑う、いつものユーノだった。
それだけでうれしくて、泣きたくなって、なのはは胸が切なくなる。
『今から逢えるかな。遅くてもうしわけないんだけど……』
「逢う！」
即答したなのはに、ユーノはくすくすと笑った。
術中にはまったようでくやしくて、なのははむっつりと眉をひそめた。
「……意地悪」
『え。なにが？』
きょとんとするユーノに、どんどんくやしくなって。
「ず、ずっと連絡くれないで、わ、私が――――」
『うん。ごめん』
あっさりと謝られて、なのはは口ごもる。
誠実な瞳。
ずっと逢えなくて、話もできなくて、どれだけさびしかったのか、とか。
どうして、ユーノは全部見透かしてしまうんだろう。

もっと平静でありたいのに、少しのことで動じないくらい、大人になりたいのに。
結局こらえきれずに、なのはは泣き出してしまった。
「……ばかぁ……」
ふえええん、と、声を上げて泣きはじめたなのはの肩をふわりと抱き寄せる手があった。
きょとん、としてその手の主を見上げると、いつのまにかテレポートしてきたユーノだった。
「ごめんね。なのは」
「……っ！」
やさしすぎる手のひらに、涙は増すばかりで。
なのはは勢いに任せてユーノを押し倒して、そのまま胸の中で泣きつづけた。
嫌われたのかと思った。
もしかしたら、「別れよう」って言われるのかと思った。
このまま、二度と、逢えないんじゃないかと思った。
いろいろなことが怖くて怖くてしかたがなかった。
「ともだち」のままなら、知らなかった。
信じるだけですべてがうまくいけばいいのに。
ぬぐいきれない不安は、きっと一生ぬぐいきれない。
なのはを抱きしめたまま、ユーノはぼんやりとその花の香りに酔っていた。
なのはは、香水をつけていただろうか。
甘い香りにむせそうになって、けれどもっと味わいたくて、抱き

しめる腕に力をこめる。
なのはは泣いているのに。
その泣き顔さえ、もっとぐしゃぐしゃにしてしまいたい。
そんな凶暴な感情に支配されそうになる。

（――だめだ！）

ユーノは渾身の理性でもって、なのはをひきはがす。
情けなくて顔も見れない。

「ユーノくん……？」

不安そうなのはの声に、ユーノはいたたまれなくなる。
だけど、これ以上近づけない。
触れられない。
肩に触れている手から、熱が届く。
このままひきよせて、抱きしめて――
だめだ。
好きだから。
大切だから。
この凶暴な感情は、そんな純粋な心と同じところにあるのに。

「……ごめん」

押し殺したユーノの言葉に、なのははずきんと胸が痛む。
それ以上、何も言ってほしくなかった。
いつもなら、泣きやむまで、やさしく抱きしめてくれるはずの胸は遠くて。

「……やだ」

「なの――――」

控えめに、怖がるように、けれどしっかりと、なのははユーノの服を掴んで。

とぎれそうなほどかぼそい声で、泣きながら言った。

「……どこにも、行かないで」

「――――なのは」

ためらうような声に重ねて、なのははひっくとしゃくりあげた。

「き……きらわ……ないで……。ひとりは……やだ……ユーノくんじゃ、なくちゃ……いやなの……」

だから、この手を離さないで。

愛おしい声と、泣き顔。

壊したくないのに。

泣かせたくないのに。

哀しませたくないのに。

いつでも笑っていてほしいのに、どうして、なにもかもうまくいかない。

自分自身にいやけがさしながら、ユーノは衝動的になのはを抱きしめていた。

強く抱きしめられて、なのははは眼を見開く。

近づいてくる唇を反射的に受け入れる。

いつもとは違う、性急で深いキス。そのまま押し倒されて、なのはは重みで身動きが取れなくなる。

苦しくて激しい。

涙が止まらないのは哀しいからだろうか。

それとも、うれしいからだろうか。
身体の芯からわきあがってくる熱で、もうなにもわからない。
ゆるんだ唇の隙間からすべりこんだ舌が絡み合う。
逃げようとしても逃げられない。
ユーノなのだから、怖いわけじゃない。
けれど不安だった。
言葉で、ちゃんと安心したかった。

どうして、逢えなかったの？
どうして、抱きしめてくれないの？
どうして、「ごめん」って謝るの？

すべての言葉はふさがれて、何も言えないし、何も聞けなかった。
キスの雨がやんだあと、ふと熱のこもった翡翠とぶつかる。
なのはを押し倒したまま、じいっとなのはを見つめる。
眼をそらせないなのはに向かって、ユーノは少し怒った口調で言った。

「――――ばか！」
「なっ……！」

いくらなんでも心外である。
反論しようとしたなのはに、ユーノはたたみかけるように言った。

「僕がなのはを嫌うわけないじゃないか。なんで、すぐにそういうマイナス思考に走るの？　仕事じゃ考えられないくらいにプラス思考なくせに、そんなに僕を信用してないの？　なのはが泣いて、僕がなんとも思わないって？　行かないで、とか、無自覚に、無責任に、そういうことは言わない！」

一気に言われて、なのはは口を金魚のようにぱくぱくとさせた。
どうして叱られているのだろう？
さっぱりわからない。
ユーノは疲れたように、あきらめたようにためいきをついて、なのはの上からどく。
「……僕が、どんな思いでなのはに逢わないようにしてたか、ちっともわかってないんだから……。……まあ、それは僕が悪いんだけど」
「ユーノくん……？」
ぶちぶちと愚痴を言うユーノをのぞきこむと、ぷいっとそむけられる。
あまりにも勝手な態度に、なのははむかあっと怒った。
「ユーノくん！」
「なに？」
「なにって、なにって――なんで、そんな、怒るの？　怒りたいのは、私だもん。理由も言わないで、逢えないって言われて、さびしかったのは私だもん！」
「僕だってさびしかったんだから、おあいこ」
「おあいこじゃないもん！　り、理由くらい、言ってくれたっていいのに。そうしたら、不安にもならないで、がまんできたかもしれないのに。私がどれだけ――」
「僕だって怖かったし不安だったし、我慢した。おあいこ」
「だから、おあいこじゃな――い！」
顔をそむけているユーノの顔を無理矢理こちらに向かせて、なのはは眉をつりあげた。

「ちゃんと、理由言ってくれなきゃ、許さないから！」
「いいの？　そんなことして」

しかし、なぜかやさぐれてしまったユーノは、ちっともこたえていないようだ。

「いいのって、なにが？」
「またキスするよ」
「へ……んっ」

言うが早いか、ユーノはためらいもなく実行に移す。
両腕を絡めとって、頭をひきよせると、そのままキスをする。
とろけるようなキスに、なのはは身体中の力がぬけていく。
顔を離すと、林檎のように真っ赤になったなのはが見えた。

「ほら、こうなるじゃないか」
「こ、こうなるって……！」

ユーノは拗ねたように、ふたたび顔をそむけた。

「ユーノくん？」
「……僕は、なのはを怖がらせたくないんだ。泣かせたくない……。……でも、どうしてもうまくいかない」
「……どうして？」
「僕が、なのはに欲情するから」
「――――え？」

あまりにもあっさりと言われて、なのはは思わず聞き返す。
ユーノが何も言わないので、自分で反芻する。
欲情？

欲情って――――

「えええええ！」

ずざざ、とあとずさったなのはに、ユーノはためいきをついた。

「たぶん、僕が思うとおりにしたら、なのはは耐えられなくて泣くよ。それで、僕は嫌われるんだ。怖がって、怯えて、口も聞いてくれなくなるかもしれない。だから、必死に自制しようと努めてるのに――――今だって努めてるんだよ。これでも。なのに、なのははまったく気にしないで挑発するんだもんな」

もうひとつためいきをついて、ユーノはくるりとなのはのほうをふりむいた。

どき、と胸が高鳴って、なのはは身構える。

穢れのない瞳に射抜かれて動けない。

「――――ごめん。責任転嫁だね。なのはは、なにも悪くない」

「……」

ユーノは苦笑して頬をかいた。

「ずっと逢わないようにしてて、なのはは……さびしかったよね。僕も、さびしかった。きっとこんなふうに、なのはを泣かせちゃうってわかってたけど、これ以上近づいたら、もっともっと、もしかしたらなのはを傷つけてしまうって思ったから」

「……」

「――――僕が、怖い？　なのは」

まっすぐで、真摯な声。

まなざし。
怖いわけ――ない。
なのははふるふると首を横にふった。
そして、きっと顔をあげる。

「怖くない」
「本当に？」
「私が、怖いのは――怖いのは……」

口に出すのも、いやなほど、おそろしいのは。

「ユーノくんが、いつか、いなくなってしまうこと……」

その笑顔が、ぬくもりが。
なのはのそばから消えてしまうこと。

「ユーノくんなら、怖くない。ほかの人はわからないけど、ユーノくんなら、なにも怖くない。だから……どこにも行かないで」
「……うん」
「逢わない……とか、言わないで」
「うん」
「ちゃんと、いっぱい……抱きしめてほしいよ」
「うん」

――そばにいて。
――うん。

ユーノは笑って、腕を広げた。
なのははきょとんとして、それから、涙眼のまま笑う。
怖くないよ。

ユーノくんだから、怖くない。
その腕の中より安心できる場所なんて、ほかにはないから。
抱きついてきたなのはをやさしく抱きとめて、ユーノは「いいの？」と尋ねる。

「なにされても、文句言えないよ？」
「……い、言わないもん……」
「へえ。それは楽しみ」
「ユーノくん！　遊ばないで！　……んっ」

月を追いかけて、走ったことがある。
届かなくて、遠くて、哀しくて。
あなたは月に似ている。
けれど、月になんかならないで。
触れることもできないまま、夜空に輝く月よりも。
今、隣にいてくれるあなたのままで。

月を追いかけて（後書き）

我慢のきかないユーノくんの話。いや、してたんですけど、一応。でも理由言ってくれなきゃなのはだってわかりませんから、ユーノが悪いですよね。なのはも無自覚に理性をあおるので、まあそこは……お互いさま？　一線を越えたかどうかはご想像にまかせます（笑）

ふたりぼっち（前書き）

「月を追いかけて」からちょっと経ってます。肌を重ねあうことにも慣れたふたりのまどろみの中で。甘甘です。要は運命だよねって話。

ふたりぼっち

ひとりはさびしくて、怖い。
だけど、そばにいてほしい人は、誰でもいいわけじゃなくて。
がんばったねって、言ってほしいわけじゃなくて。
つらかったねって、言ってほしいわけじゃなくて。
大切なのは、きっと、手を繋ぐこと。
大好きな、かけがえのない人と、手を繋ぐこと。
ひとりじゃなくてふたりなら、きっと、どこまでも強くなれるから。

「……なのは？」

呼ぶ声に、なのははうっすらと眼を開ける。
心配そうになのはをのぞきこむのは、若草の緑をそのまま映したような澄んだ瞳。
この腕の中で眼が覚めるのは、いったい何度目だろう。
はじめての朝は、うれしくて、しあわせで、ドキドキが止まらなかった。
目の前にいるユーノが幻ではないことを何度も確かめた。
今は———今でも、夢を見ているような幸福に酔いしれてしまう。

「泣いていたの？」

ユーノの細い指が、ぽろりと頬に落ちているなのはの涙をぬぐってくれる。

そこでようやく、なのはは自分が泣いていたことに気づいた。
どうして？
自分でも、よくわからなかった。

「……だいじょうぶ。あれ？　なんだろう……夢を見ていたの。でも、覚えてないんだけど。いやな感じじゃなかったよ」
「でも、泣いてる」
「……みたいだけど。哀しくないよ」

ちょっと切ないような、もどかしいような、じれったいような。
なんとも言えない感じ。

「なら、いいんだけど」
「ユーノくんは、心配性」

くすくすと笑って、ユーノの胸に頬をすりよせる。
まだ夜明け前だ。
もう少し、このぬくもりとともにまどろんでいたい。
そうかなあ、と、ユーノは少し面白くない。

「眼が覚めたら、隣でしくしく泣いてるんだもの。心配くらいするよ」
「……たぶんね。小さいころの夢だよ。ユーノくんと初めて逢ったときくらいの」
「僕と？」
「うん。ふふふ、びっくりしたなあ。あのときは……」

この話では、なのはが圧倒的に優位な立場である。
なかなかな醜態をさらしてしまったと、ユーノは今でも恥ずかしいのだ。

「一日で――――一瞬で、人生が変わっちゃった」
「後悔してる？　……いたっ」

二の腕を容赦なくつねられて、ユーノは苦笑する。
こういうことを訊くと、なのはは必ず怒るのだ。わかっていても、訊いてしまうのがユーノの情けないところなのだが。
……たぶん、否定してほしいのだ。そうして何度も、安心したい。不安はすぐに生まれるから。自己分析をして、ユーノはますます自分が情けなくなった。

「したことは一度もないって言ってるでしょ」
「うん。……ごめん」
「もう、ユーノくんは、なんでもかんでも、背負いこみすぎ」
「なのはには言われたくないけど……」
「ユーノくん？　いまは、私の話はしていないのよ？」
「……はい。ごめんなさい」
「よし」

素直に謝ると、なのはは満足したようににこにこと笑った。
かわいくて、ユーノがそのやわらかな頬にキスをすると、くすぐったそうに身をよじる。
そしてお返しとばかりに、ユーノの頬にキスをしてきた。
瞳が見つめあって、自然に唇が触れ合う。
何度目のキスだろう？
数えたことはないけれど、何度キスをしても、きっとこんなふうに、胸はさわがしく跳ねるのだろう。
キスも、抱擁も、身体を重ねることも。
あの日、ユーノに出逢わなければ、得ることのできなかった幸福。

「……夢の中でね、たぶん、私はひとりだったの」
「……ひとり？」
「うん。……お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも、お姉ちゃんも、みんな大好きだった。みんなも、私を大切に思ってくれてた。でも……私では立ちいれない、絆……っていうか、こう……世界みたいな。そういうのが、お父さんとお母さん、お兄ちゃんとお姉ちゃんの間にはあって……。ひとりの時間が多かったせいもあるけど、ずっと……きっと、誰かを探してた」
「誰か？」
「うん。ユーノくんを、探してたんだよ……」

探していた。
見つからなければわからないだれか。
――世界でたったひとり、わかちあえる『だれか』。

ユーノが、息を呑むのがわかった。
頬に手を添える。
涙がにじんで、ユーノの姿がかすむ。
それでも、自然と笑みがこぼれた。

「……呼んでくれてありがとう。ユーノくん」
「――うん」

ユーノの眼も、涙でにじむ。
この幸福を、なんという名で呼べばいいだろう。
ああ、伝えなくては。
ユーノも探していたのだと。
曖昧な気持ち。
不確定な心。
けれどどこかできっと探していた。

求めていた。
ユーノもまた、ひとりだったから。
スクライアの一族として生まれたが、父と母の顔は知らない。
特定の育ての親もなく、「放浪の一族」の名のとおり、世界を流れて生きてきた。
幸福だった。
不満はなかった。
誇りもあった。
――けれど、空虚だった。
なのはに出逢ってから、世界は色を変えた。
なんて鮮やかで美しいのだろう。

――そうか、世界は、本当は――こんなにも素晴らしいものだったのか。

なのはがユーノを変えた。
強い心と弱い心をあわせもち、さびしくても苦しくても、誰かのために笑える少女を。
心から守りたいと思った。
せめて、自分の前でだけは、飾らないままで。
どうか、泣いてもいいから、最後には笑って。

「ユーノくん……？」
「――ありがとう。なのは」

抱きしめる腕に力をこめて、ユーノはなのはを見つめた。

「僕も、なのはを探してた。――ずっと、探していたよ」
「ずっと……？」
「ずっと」

「……うれしい」

へにゃ、と、なのはの顔がくずれる。
そのまま、見られたくないのか、ユーノの胸に顔をうずめた。
ユーノも、涙でぐしゃぐしゃの顔は見られたくなかった。

助けて――――と。
あのとき呼んだのは、なのはだった。
ほかのだれでもない、ユーノはなのはを呼んだのだ。
だれかではだめだった。
なのはでなくては、だめだった。
逢えてよかった。
きみに逢えて、よかった。

きみに出逢うために、僕は生まれてきたのだろう。

なのははひとりだった。
ユーノはひとりだった。
けれど、ふたりになった。
ひとりぼっちはさびしくても、ふたりぼっちならさびしくない。
辛いことも、苦しいことも、のりこえていけるだろう。
楽しいことやうれしいことを、たくさん増やしていけるだろう。

「……二人で泣いて、なんだか、子どもみたい」

なのはがくすくすと笑う。
子ども？
そうかもしれない。
新しく生まれ変わった気分だ、と、ユーノも笑う。

「でも、なのははよく泣いてるけど……」
「泣かせてるのはユーノくんだもん。いつもは、そんな泣き虫なんかじゃないんだから」
「……と言われても、僕は、僕といるなのはしか知らないからなあ」
「……それもそうだね」
「でも、教導隊の練習風景なんか見てると———」
「見てると？」

期待をこめた眼で見つめられ、ユーノは慎重に言葉を選ぶ。

「えーっと……かっこいいお姉さんって感じ」
「えへへ。まあね」
「がんばってる感じ」
「がんばってますから」

なのはがうれしそうにはにかむので、ユーノもうれしくなった。
こんな言葉ひとつで笑ってくれるなら、いつでも言うのに。
けれど———

「……でも、僕は、僕といるときのなのはが、一番好きだな」
「どうして？」
「かわいいから」

きっぱりと言い切られ、なのはは一瞬間を置いたあと、かあっと赤くなった。
リトマス試験紙みたいにわかりやすいなあ、と、ユーノはおもしろそうになのはの顔をのぞきこむ。

「……意地悪。からかわないで」
「本当なんだけどなあ」

「うそ」
「どうして？」
なのははむう、と頬をふくらませて反論する。
「だって、かわいくないもの」
「どうして？」
「ユーノくんといるときの私は、私の中で一番かわいくないの」
本当は、一番かわいくありたいと思っているのに、どうしてもうまくいかない。
ユーノは不思議そうにたずねる。
よくわからないようだ。
「だから、どうして？」
「すぐにわがまま言っちゃうし、怒るし、わがまま言うし、泣き虫だし……。……自覚はあるの。でも、ユーノくんに甘えるの、気持ちいいんだもん……」
だから、歯止めがきかない。
もっと大人っぽく、毅然と接することができたらいいのにとも思うけれど。
ぷ、とユーノが吹きだすと、なのははますます真っ赤になった。
「意地悪！」
「ご、ごめん。だって、おかしくて」
「どうせ……」
「ちがうよ。そうじゃなくて」
「なくて？」
「僕に甘えてくれるなのはが、僕は、一番かわいいと思ってるのに

ってこと」
「……どうして？」
あまりにも意外だったようで、なのはは眼を瞬かせる。
ユーノは、「そういえばどうしてだろう」と考えた。
「でも、なのはに甘えられるの、気持ちいいよ」
「そうなの？　……気持ちいいの？」
「うん。だから、遠慮しないで、どんどん甘えていいよ」
「……図に乗るよ？」
「どうぞ」
「ユーノくんは、甘すぎだなあ。……私に」
「そうかな」
そんなつもりはないんだけど、と、ユーノは頬をかく。
昔から変わらない笑顔。
（変わらないね。ユーノくん）
もちろん、変わったこともたくさんあって。
だけど、大切なところは、いつまでたっても変わらない。
「ちなみになのはは、僕のどういうところが一番好き？」
「え？　……うーん。一番？」
「一番」
「眼！」
即答するなのはに、ユーノは不思議そうに首を傾げた。
「眼？」

「うん」
「どうして？」
「……」
「なのは？」
「笑わない？」
「うん」
「本当よ。絶対、絶対、笑わないでね」
「わかった」

念を押してから、なのははコホン、と咳払いをして切り出した。

「……あのね、きれいな緑色も好きなんだけど。一番好きなのは、のぞきこむと、私が見えるでしょう？　ああ、ちゃんと、ユーノくんの眼には私がちゃんと映ってるんだなって……実感するの。だから、好き」

その瞳が、なのはのことを「好きだ」と伝えてくれるから。

「……笑わないでね？」

上目遣いで確認をするなのはを、ユーノはやさしく抱きしめた。
「好き」という気持ちが、形になればいいのに。
ユーノがなのはをどれだけ好きなのか伝わるだろうに。
いや、見えないからこそ意味があるのか――――

「ユーノくん？」
「好きだよ」

伝えたくて、もどかしくて、ユーノは言葉を紡ぐ。
ほかに、なにを言えばいいのだろう？

「なのはが、好きだよ。……好きだ」
しかし壊れたテープのように、「好き」という言葉しか出てこなかった。
「好きだよ。……なのは」
耳元でささやけば、びくっと身体がふるえるのがわかる。
そのまま頬をなぞってキスをねだる。
「ユーノく――――」
「好きだ」
「ま、って……んっ」
あわてるなのはを押さえこんで、キスをくりかえす。
麻薬のように、止められない。
果てはきっとない。
きっとずっと、好きなのだから。
「――――ずるい。自分ばっかり……」
「ずるいって言われても……」
「ずるいの！」
「……はい。ずるいです」
ふたりで、手を繋いで。

これからも、いっしょにいましょう。
ふたりなら、ふたりぼっちなら。
きっと、怖くても、ぬくもりを信じられるから。

ふたりぼっち（後書き）

これ、書いたのずいぶん前なんですけど、はっ、恥ずかし――――！＞＜いやはや。恥ずかしいですな。でも上げます。この恥が次に生きると信じて。ユーノは恥ずかしい台詞でもさらっと言えますし、なのははユーノに甘えるの大好きですから、自然とものすごく恥ずかしい会話ができあがります。

あなたを教えて（前書き）

長いです。エロいです。意味がわかりません。
なのはと待ち合わせをしていたら、雨が降ってきた。傘はない。濡れるままに、時が過ぎるのを待った。このまま、なのはが来なければいいのに。———そう思う自分を、殺すことができないまま。

あなたを教えて

あなたを知りたい。
もっと知りたい。
だから、あなたを教えて――――

きみを知りたい。
もっと知りたい。
けれど、もう、これ以上近づきたくない――――

雨が降っていた。
さあああ、と、流れるように細い雨は、濁った灰色の雲から生まれ続け、ユーノの髪を、頬を、肩を、濡らしていく。
今日は雨の予報があっただろうか。
そんなことをぼんやりと考えながら、噴水に腰かけたまま、傘を用意しようともせず、雨宿りしようともせず、ただ、濡れた指先を眺めていた。
今日はなのはと待ち合わせて、食事をすることになっている。
だからきちんとスーツを着込んでいるのだが、……それも無意味になってしまった。さすがに、こんな恰好で店には行けない。
自分は、なにをしているのだろう？
いつもなら雨に濡れないように傘を買うなりなんなりして、なのはに連絡して待ち合わせ場所を変えて――――

どうして、そうしないのだろう。

携帯の電源を切って。

雨の中、いつまでもなのはを待って。

心のどこかで、このまま来なければいいのに、なんて思いながら。

彼女が僕の人生を変えた。

彼女は僕の人生を変えている。

けれど怖くなる。

だから怖くなる。

世界が彩りを増せば増すほど、「今」が幸福であればあるほど。

（……ネガティブだよなあ。僕）

濡れた前髪から滴がしたたり、視界を遮る。

今、何時だろう。

確認するのも面倒になってくる。

ああ、このままなのはが来なければ。

なのはを待ち続けたまま、なのはを思う幸福な気持ちを抱えたまま――――

いなくなって、しまえるだろうか。

「ユーノくん……？」

影が差し、身体に刺さる雨がやむ。

顔をあげると、傘をさしたなのはが、心配そうにユーノをのぞきこんでいた。

「どうしたの？　傘もささないで……風邪ひいちゃうよ」

「――」
「え……。……なあに？」

きみを知りたい。
もっと知りたい。
けれど、だから、もう、きみに近づきたくない――

ユーノはなにも言わずに立ち上がり、なのはを強く抱きしめた。
冷えた身体が熱を持つ。
なのははかすかに身じろぎをするが、やがて抵抗をやめた。
傘が落ちる。
ころころと円を描いて転がり、そして止まる。
心臓の音が重なって、不器用な音を奏でた。

恐怖。
衝動。
祈りにも似た熱情。

ふるえる指で、なのはは力なく、ユーノの背中を抱きしめた。
熱が灯り、雨音が耳を撫でる。
雨の中、佇むユーノを見つけて驚いた。
雨に濡れた艶やかな髪が、伏せられたまつげの間から覗く翡翠の瞳が。
ひきしまった肢体が、愁いを帯びた横顔が、すべてが完成された絵画のように美しくて。
儚く見えて。
まるで知らない誰かのようで。

胸が痛い。
胸が――痛い。
どうして好きなんだろう。
どうして、立ち止まってくれないんだろう。
いつだって、泣きたいくらいにあなたが好き。
あなただけが好き。

「ユーノくん……？」

ゆっくりと顔があげられる。
よく知っている顔のはずなのに、全然知らない人のように思えた。
翡翠の輝きに魅入られて、気づけば抱きすくめられていた。
広い胸と、しめった雨の匂い。
力がぬけて、なのはは傘を落とす。
声が出なかった。
なにかを――そう、なにかを言わなくてはいけないのに。

『どうしたの？』
『なにかあったの？』

いつものユーノではない。
それはわかるのに、言葉が何も出てこない。
ただ、離したくなかった。
離してほしくなかった。
どこにも行ってほしくなかった。
ずっとこうして、触れていたかった。

「ユーノくん……。……怖いよ」
「なにが？」
「なにを考えてるの？」
「なにも――――なのはのことだけだよ」
「……うそつき」

変わらない笑顔が月明かりに光る。
吸い寄せられるように唇を重ねて、そのままやわらかいベッドに倒れこんだ。
キスに酔いそうになりながら、なのははわずかに抵抗を示した。

「待って……風邪ひいちゃう」
「風邪？」
「身体、冷たいよ」
「すぐにあたたかくなるよ」
「……だめ」

意味がわかって、なのははかあっと頬を赤らめた。
その仕草がかわいくて、ユーノはくすりと笑んでから立ち上がる。

「じゃあ、いっしょにシャワー浴びる？」
「……えっ！」

なのはは一拍置いてから、ずざざっと後ずさった。
ユーノはおもしろそうに含み笑いをしながら、なのはにつめよる。

「そういえば、一緒にお風呂入ったことなかったよね」
「そ、そ、それは、だって……恥ずかしいし」

ぴったりとベッドの端に背をくっつけて、なのはは近づいてくる

ユーノから眼をそらす。
とても意地の悪い顔だ。
見てはいけない、と、なのはは直感した。
「もっと恥ずかしいこと、いっぱいしてるのに」
「やぁんっ」

耳たぶをぺろりと舐められて、なのはは悲鳴を上げる。
それはそうだ。
確かにそうだ。
こうして肌を重ねるようになって、ずいぶん経つ。
「ユ、ユーノく……だ、だから、お風呂……！」
「うん。だから、一緒に入ろうよ」

いつのまにかがっちりと両腕を押さえこまれ、なのはは涙眼になる。
ユーノの舌が、首筋をつうっとなぞった。
「……っ」

なのははびくりとふるえあがる。
熟れた唇に、かみつくようにユーノが口づける。
「んン……っ！」

あまりの激しさに、なのはは眼を白黒させた。
脳が芯から溶けていきそうになる。
なにも考えられなくなる。
それではだめだと、どこかで警鐘が鳴るのに。

しゅるりと音がして、なのはの白い肌があらわになった。

「……っ！　ユーノくん！」

「服を着たまま、お風呂に入るの？」

「あ、そっか……って、じゃなくて！」

必死に胸のあたりで服を押さえながら、なのはは抗議する。

「一緒には入らないったら！」

「やだ」

「やだって———んんっ……」

「僕は、一緒に入りたい」

キスで言葉をふさぎながら、ユーノはなのはを抱きかかえた。

なのはは必死で抵抗するが、そもそも力があまり入らない上に、がっちりと抱えられてしまっているので、あまり自由になる箇所がなかった。

脱衣室の床になのはをおろして、ユーノはするするとなのはの服を脱がせていく。

ずいぶん慣れてきたなあ———と、その自然な仕草に見とれている場合ではない。

「ユ、ユーノくん！」

「うん？　なに？」

「……今日、なんだか、変だよ」

ビー玉のような眼でじっと見つめられて、ユーノは手を止めた。

「……変かな？」

「うん」

「どんなふうに？」
「どんなって――あの……それは……」
いつもより積極的というか、意地悪というか……。
頬を染めるなのはに、ユーノはくすりと笑う。
「いつもより、いやらしい？」
「！」
「それは、しかたない」
「しかたないって、どうし……っ」
つつ、と、首筋を撫でられ、なのははぎゅっと眼をつぶる。
胸元で服を押さえて、なのはは必死に流されまいとした。
眼を見てしまうからいけないのだ。催眠術にかかったように、逆らえなくなってしまうから。
「――僕は、いつもと同じだよ」
「……うそ……」
「うそじゃないよ。いつもはね、隠してるだけ」
「……隠す？」
「言いたくないな。嫌われたくないから」
一方で、すべてをぶちまけて、嫌われてしまいたいとも思うけれど。
試すような言い方に、なのはは思わず言い返す。
「嫌ったりしない……」
「聞いてもないのにわかるの？」
「わかる……もん」

ユーノの細くて硬い指が、首筋を伝って下に降りてくる。
少しだけ胸に触れて、またびくりと身体がふるえる。

「……たとえば、僕が、本当は、もう二度となのはに逢いたくないって思っていても？」
「――――」

真剣な声音に、なのははひくっと息を呑んだ。
静かな眼。
なにも聞こえない。
たとえ、嘘でも、本当でも。
心に、ひびが入ってしまったように、急激に熱が冷めていく。
ユーノがぺろりと、なのはの頬に伝った涙を舐めたとき、なのははようやく、自分が泣いていることに気づいた。

「――――ごめん。泣かないで」

そして勝手なことを言う。
なのははこらえきれなくなって、右手をふりあげる。
ぱんと渇いた音がして、前髪でユーノの瞳が隠れた。

「――――ばか！　ずるい！」

そんなふうに、人を試すなんて。
うそでも、ほんとうでも、痛くて、痛くて、しょうがないのに。
ユーノはなのはから少し離れて、うつむいた。

「……僕は、なのはが好きだよ」

それは真実。

たったひとつの、心を照らす光。
そして、闇を呼び込む穢れ。

「なのはが好きで、好きで――――逢えば逢うほど、触れれば触れるほど、好きになる。もっと知りたくて、もっと好きになりたくて――――もう二度と逢いたくなくなる」

この気持ちに、きっと果てはない。
それが怖かった。
おそろしかった。
餓えた獣のように彼女を求めたくない。
知ることに果てがないように、彼女を追いつめたくない。

「今だって好きなのに、これ以上どうしようもないくらい好きなのに、まだ先があるんだ。なのはの全部を手に入れたくて、壊したくて、僕と同じように穢してしまいたくなる。そのくせ、ずっと今のまま、変わらない、綺麗なままのなのはでいてほしい。逢えなければ逢いたくなるくせに、逢ってしまえばそんな自分を止められない」

矛盾する。
それでも止まらないまま、形にならない言葉を吐き出していく。
それでも、どうか受け入れてほしい。
このまま幻滅して、この手を離してほしい。
どちらが、本当に自分が望んでいることなのだろう。
赦して。
受け入れて。
赦さないで。
すべてを拒絶して。

「なのはに隠してる自分なんてたくさんある。これからだって、全

部は見せられない。うそつきで、あさはかで、卑怯者で、臆病な情けない男だよ。……今日も、なのはが来なければいいのにって思ってた。なのはが来ないまま、この雨に溶けてしまえたら、どんなにいいだろうって———」

いつか、壊れてしまうなら。
いつか、消えてしまう幸福なら。
もしかしたら、この手で潰してしまう愛おしさなら。
今のまま、このまま———

「……来ないほうがよかったの？」

ふるえる声でたずねるなのはに、ユーノは自嘲気味に頷いた。

「そうだね。でも、なのはは来たから———」

そのまま肩を掴んで、冷たい床に押し倒した。
長い栗色の髪からこぼれる滴が、なまめかしくなのはの肌を濡らした。
焦がれるように、ユーノはいくつもキスを落とす。

「ユーノ、くん……っ」

額に。
髪の毛ひとすじに。
頬に。
時には、言葉をふさぐように唇に。

「それでも、なのはは来たから———」

まるで、宝物を見つけたかのようにうれしくて。
触れたい。
すべてを、自分だけのものにしたい。
そんな子どもじみた幼稚な独占欲が抑えきれなくなって。
泣かせたくて、苛めたくて、印をつけたくて。
結局、こうして、自分の中に棲む獣の言うなりになっている。
なのはが泣いているのに、泣かせたくないのに、もっと泣かせたくなる――――
はだけた衣服が、あらわになった肌が、雨で濡れた肢体が、ユーノを狂わせていく。
狂った獣は花を散らす。
どれほどの罪を背負うことになっても。

「だ、だめっ……！　――――お風呂！」

ユーノはきょとん、として、手を止める。
なのはは真っ赤になって、自分の発言を省みた。

（お、思わず――――じゃ、じゃなくて、ええっと……で、でも……！）

何も言わないユーノに、なのははますます恥ずかしくなるが、もうひきかえしようがなかった。

「……お風呂、入ろう……？」
「いっしょに？」
「……いっしょ、に」
「いいの？」
「……意地悪！」

聞き返されて、なのはは「うわあん」と暴れ始める。
それを押さえつけて、ユーノは首をかしげた。
「なにが？」
「も、もう、何度も言わせないで……」
「そうか。ごめん」

ユーノは起き上がると、なのはの下着に手をかける。
服は、すでにユーノによってほとんど脱がされていた。
なのははあわてて、ずりおちそうになる下着を手で抱える。
「じ、自分で脱げる！」
「でも……」
「でも？」
「脱がせたいから」
「……っ！　えっち――――！」
「いまさら……いたっ」
「もう、もう、いいから、先に入ってて！」

ぽかぽかと叩いてくるなのはに、ユーノはくすりと笑って頷いた。
「わかった」

そしておもむろに、服をぬぎはじめる。
なのはは思わず背をそむけた。
（……そ、そうだよね。ユーノくんだって……い、いっしょに入る……んだから……）

ユーノの裸を見るのは初めてではないのに、顔が熱くなるのを止

められない。
なんだか、自分がとてもいやらしくなってしまったように思える。
（ふえええええん。ユーノくんのばかあああああ）
責任転嫁するなのはの首筋に、ユーノは不意打ちでキスを落とした。
「ひゃあっ！」
「じゃあ、お先に」
「……ばか」

泡風呂に、ユーノとなのはは向かい合って入っていた。
スイートルームなので、お風呂も十分な広さがある。
なのはは端で体育座りをしながら、ぶくぶくと泡を鳴らしながら、恨めしげにユーノを睨みつけている。。
向かいの端で、ユーノは呆れたようにためいきをつく。
なんとわかりやすい。
けれど一方で、なのはらしいとも思う。
「なのは。なにもしないから、こっちに来ない？」
「……そういう問題じゃないんだもん」
むう、と顔をしかめるなのはは、あいかわらずぶくぶく言っている。
じゃあどういう問題なんだろう。
ユーノが近づこうとすると、なのはは悲鳴を上げた。
「きゃ――――っ！　だ、だめ！　こっちに来ちゃだめ！」

「なのはの裸なんて、もう見たことあるよ」
「それでもだめ――――！」
「なんで？」
「……は、恥ずかしいから」
「だから、それ、いまさら……」
「い、いいい、いまさらでも、なんでも、恥ずかしいの！」

確かに、ベッドの上ではよくて、お風呂はだめなんて、ユーノには理解できないかもしれないけれど、なのはにとっては切実なのである。
自分でもうまく説明できないけれど、やっぱり、お風呂は恥ずかしいのだ。
今だって、頭が沸騰して気絶しそうだというのに。
それに――――まだ、ユーノには、聞きたいことがある。

「……二度と、逢いたくないって」
「え？」
「ずっと、思っていたの？　今まで……」

泣きそうなのはに、ユーノはしばし言葉をなくす。
うそをついてもいい。
ごまかしてもいい。
偽ってもいい。
それで、なのはが泣かないですむのなら、ユーノは平然と選べるだろう。
けれど、それでも、なのははきっと見破ってしまうから。

「……ずっとじゃないよ。でも――――思うときもあった」
「……どうして？」
「逢えば、もっと好きになるってわかってたから……逢いたくなか

った」
「……そんな言い方、ずるい」
なのはは怒ればいいのか、哀しめばいいのか、それとも喜べばいいのか。
わからなくなる。
「じゃあ、無理してたの？」
「してないよ」
これには即答する。
少しずつ、心の波がおだやかになっていく。
なのはがそろそろと顔をあげたので、ユーノは笑った。
「逢ったら、それまでなにを悩んでいたんだろうって吹っ切れて、楽しくて、うれしくて、しあわせで――――やっぱり、逢う前よりずっと、なのはを好きになったよ」
迷いのない澄んだ言葉に、なのはは泣きたくなる。
ずっとずっと、好きになる。
気持ちに果てはないから。
知りたくなる。
あなたを、今までよりずっと、たくさん、知りたくなる。
教えてほしい。
どんなあなたも、私はきっと好きになる。
「でも、ひとりになったとき、また怖くなるんだ。このまま『好き』が大きくなって、自分で制御できなくなったらどうすればいいんだろうって。狂ったままなのはを求めて――――壊してしまったらどうしよう……どこかに、それを望んでいる自分もいて、それがすごく

怖くて、いやになって……。……二度と、逢いたくなくなるんだ。
それでもやっぱり、もう一度逢いたいと思う」
「……私だって、怖い」
「なのは？」

顔があげられない。
今、眼を見たら、きっと泣き出してしまう。

「私だって———逢えば逢うほど、ユーノくんを好きになる。もっと、ユーノくんを知りたいって思う。大きくなっていく気持ちを止められない。……だけど、逢いたい」

この気持ちはどこから生まれて、いったいどこに行くんだろう？
わからないの。
なにもわからないの。
でも、失いたくない。
だから、ひとつだけ。

「……わたしは、あなたに逢いたい」

あなたに逢いたい。
ずっと———逢いたい。
壊れても、穢れてもいい。
ひとりで、綺麗なままで、生きていくのなら。
水音とともに、泡が弾ける。
伸ばされた細い腕が、手が、ユーノに触れた。
それでも、ユーノは動かない。

「あなたを、教えて……」

今よりもっと、あなたを好きになりたい。
今よりもっと、あなたのことを知りたい。
今よりもっと、あなたに近づきたい。
だから、あなたもおそれないで。
私に触れることを。
私に近づくことを。
私を知ることを。
私を———好きになること。

ためらわず、なのははユーノにキスをした。
わずかに、ユーノの唇がふるえるのがわかる。
なのはがきちんと覚えているのはそこまでで、そのあとは、かみつくように返されたキスの熱と、身体の重さと、抱きしめてくれる胸のあたたかさと。
それから、翡翠の瞳にうつる自分だけが、世界のすべてだった。

「……なのは。だいじょうぶ？」
「……ユーノくんのえっち」

ひとつのシーツにくるまりながら、ユーノの胸に顔をうずめて、なのははぼそっとつぶやいた。
身体がだるくて、指一本動かしたくない。
ユーノはくすりと笑う。

「なのはから誘ったのに」
「！　だ、だからって、ユーノくんはやりすぎなの！」
「そう？　これでも控えたのに」

なのははぱくぱくと口を金魚のように開閉する。
これで「控えた」のなら、「本気」になったら、なのはは本当に壊されてしまうかもしれない。
まだ、身体の芯に熱が灯っている。

「なのはだって、あんなに啼い――――」
「きゃあ！　きゃあ！　言っちゃだめ！」
「……そうなの？」

別に誰かに聞かせているわけではないのに、なにがそんなに恥ずかしいのだろう。

「意地悪！」

そして、意地悪と言われる。
なんだか理不尽だ、と思わなくもなかったが、無理をさせてしまったのは確かなので、素直に謝っておくとしよう。

「ごめん」

けれど、なのはだっていけないと思う。
壊してしまうかも、とユーノが怖がっているとわかっていて、自分から誘惑するのだから。
ユーノの自制心を根本からぽきっと破壊しておいて、「意地悪」とか「えっち」とか非難ばかりするなんて。――――言葉そのものは否定しないが。
ちなみに、なのは以外の人間に、「意地悪」とか「えっち」とか、言われたことはない。
けれど、「好きだから苛めたい」とか、そういうことではないよ

うな気がする。
本当はやさしくしたいのだ。
なのはの求める自分でありたい。
それでも裏切ってしまうのは――――どんな自分でも赦してくれると、どこかで甘えているのだろう。
大きな矛盾だと思う。
一生、解消されはしないのだろう。
それでもいい、と、思う。
こんなに甘くて幸福な矛盾なら、いくらでも受け入れよう。

知らないきみを求め続けよう。
好きでいることを、好きになることを、おそれないために。

「……ユーノくん。まだ、怖いの？」
「なにが？」
「……二度と、逢いたくないって、まだ、思うの？」
「……だったら、どうする？」
「それでも――――私は、逢いにいくよ」
「逃がしてくれないんだ」
「……やだよ」
「歓迎するよ」

そして、うれしそうにはにかむきみに、僕はキスをする。

あなたを教えて（後書き）

……すみません。いや、よくわかりません。書いたのずいぶん前なので、あらためて読んだら恥ずかしくて恥ずかしくてどうしようかと思いました。いわゆる「好きすぎて不安」ってやつでした。はい。はた迷惑な！ストックはあるのですが、時系列あんまり考えないで書きなぐったものばかりなので、連載する順番に迷っています。どうしよう……あんまり考えなくてもいいですか……。

恋色（前書き）

「私のどこが好き？」――なのはの問いに、ユーノは考えて、心の中にある答えを言葉にした。

恋色

高町なのはは、ユーノ・スクライアに恋をしています。

私が、ユーノくんについて知ってること。
本が好き。
遺跡とか、古いものも好き。
頭がよくて、顔は……そうだなあ。
女の子みたいに綺麗。
だけど、きちんと「男の子」だなって思うのは。
やわらかいのに力のある声、とか。
細いのに筋肉質な背中とか。
大きなてのひらとか。
そして、自覚はないけど、……実は、とても女の子に人気がある。
あんなにたくさん女の子に告白されてるくせに、くせに……くせに……。
う、いけない、いけない。
もやもやしてきちゃった。
ええと、あとは、なんだっけ。
そう……すごく真面目で、すごく頑固。
一度決めたら、絶対にやりぬく。
絶対に、最後まであきらめない。
そういうひと。
だけど、ときどき、悪い方向にもつながる……というか、悪い癖、かな。
自分のこと、すごくおざなりに扱う。

どうでもいいみたいに。
「誰か」の命はすごく大切にするくせに、自分のことは、ときどき、すごく――――どうでもいいみたいに、思ってるみたい。
私は、ユーノくんのそういうところが大嫌いで……でも、やっぱり、大好きなんだけど。
だから、いつも、私は怒って。
……やっぱり泣いちゃって。
ユーノくんは、私を泣かせるのがうまい。
うまいというか……私が勝手に泣いてしまうというか。
どうしてなんだろうって、今までもたくさん考えた。
好きだから、とか。
ユーノくんの前では、自分を偽らないですむ、とか。
理由はいろいろあって、間違っているわけじゃないけど……。
本当は――――本当は、まだ、わからない。
日に透けると、金色みたいにきらきら輝く、長い髪。
無造作に伸ばしていたから、邪魔かなあってあげたリボンを。
何年も前のものなのに、彼は今でも身につけてくれている。
そんな些細なことが、いつまでも胸を焦がす。
あたたかい緑の瞳。
宝石のように輝き、草花のようにやさしく、私の姿を映す鏡。
私が知っている彼のこと。
思い出。
記憶。
だけど、ほんのひとかけら。
こぼれおちたかけらを、私はひろいあつめて。
胸に落とす。
たからものを瓶に集めるように、落とす。
ころんと、音がする。
色とりどりのかけらが、ふりつもっていく。

――――恋の色って、何色だろう？

「え？」

ティーカップを片手に持ったまま、ユーノは眼を瞬かせた。
ゆるやかな昼下がり、一緒に食事をしたあと、ユーノの部屋でひといきついていたところ、なのはは唐突に切り出した。
ぴくりとも動かないまま、ユーノはなのはを凝視している。
耐え切れなくなって、なのはは眼をそらした。心なしか、顔が赤い。

「……あんまり、見ないで」
「あ、うん」

ユーノも続いて眼をそらす。
かあっと、頬が熱くなるのを感じた。

――――私のどこが好き？

それが、なのはの質問だった。
とぽとぽと、紅茶の注がれる音だけが空間を支配する。

（……あうう、き、聞くんじゃなかった……！）

下を向いて、なのはは羞恥心と葛藤していた。
思わずぽろっと聞いてしまったが、本当は聞くつもりのなかった質問だったのに。

ユーノは真面目だから、真面目に考えて、真摯に答えようとしてくれることはわかっていた。しかし、その答えを聞くのは、なんだか怖かった。
どうして———怖いのだろう。
同じ質問を返されたら、明確な答えを用意できる自信がないからだろうか？
好きな気持ちに不安はないのに、理由が見つからないなんて。
ユーノは紅茶を煎れたあと、なのはの隣に腰かけて、背を向けて紅茶を飲んだ。
ちらりと盗み見ると、耳まで赤い。
……ユーノも恥ずかしいのだろうか。
返事がないのは、なのはと同じように、理由が見つからないからだろうか？

（……私は、どっちがいいんだろう）

どんな答えを、期待しているんだろう。
どくん、と、胸が不吉な音を奏でる。
……だめだ。
やっぱり、聞くのは怖い……！

「あ、あの、ユーノくん、やっぱり———」
「———泣き虫なところ」
「え？」

背中を向けたまま、ユーノはつぶやいた。
なのははきょとんとして言葉をなくす。

「それから、意地っ張りなところと、強情なところと、言い出したらきかないところ。あきらめが悪いところ、負けず嫌いなところ。

あとは、そうだな……傷つきやすいところと、泣きながら怒るところ」
「……」
「決めたらつっぱしって、たまに暴走するところと、かくしごとができないところ。恥ずかしくなったり、くやしくなったりすると、意地悪って僕を責めたてるところ……」
「ユ、ユーノくん！」

なんだか文句を言われているような気がする。
そ、それは確かに、すべて否定できない事実ではあるのだが――――
そこを好きだと言われても、うれしいようなうれしくないような。
ユーノはなのはのうろたえぶりなどなにも気にしないふうに、話を続けた。

「あとは、そうだな……さびしがりやなところと、ひとりぼっちがきらいなところと……」
「……ユーノくん。もういい……」
「あれ。まだあるのに」
「もういいの！　もう、意地悪！」
「ほら。意地悪って言った」

ユーノはくすりと笑って、なのはのほうを向く。

（！　か、かかか、からかってる！）

くやしくなって、今度はなのはがそっぽを向いた。

「もう！　私は……本気で聞いたのに」
「僕だって、本気で言ってるよ」

ふわりと後ろから抱きしめられて、なのははぶすくれながらも、その胸にこつんと頭を預けた。
首にまわされた腕に、自分のそれを絡める。
「じゃあ、なんでそんなところが好きなの？　……面倒ばっかりじゃない」
「……そこまで聞くかな。僕だって恥ずかしいんだけど」
「私のこと、からかってるだけじゃない。どうして恥ずかしいの？」
「全部、本当に本気だから」
耳元でささやくと、ユーノはそのまま耳たぶをぺろりと舐めた。
「！　ユーノく――――んぁっ」
そのまま抱きしめる腕に力をこめて、なのはを逃がさないようにする。
熱くてぬるぬるとした舌が、なのはの左耳を弄った。
「や、やだ……ユーノ……く……やだぁ……」
「なのはは、耳が弱いなあ。あ、もちろん、そこも好きだよ」
「ばかっ……！　んんっ……」
必死に声を抑えようとするけれど、どうしても漏れる声を止められない。
じんじんと、身体の芯から熱くなる。
逃げようにも、どんどん力がぬけていく。
「ひぁんっ！」
かりっと甘噛みされれば、一段と高い声が上がる。

「ねえ、なのは。こっちを向いて。キスがしたい」
「……い、いや」
せめてもの抵抗を試みるなのはだが、ユーノはそれすら予想していたようだった。
それじゃあ、と、さらに身体を密着させる。
「なのは」
耳元で甘い声。
びりり、と、身体に電気が走ったように、しびれてしまう。
「どうして、いやなの？」
「……し、質問……答えてもらって……ない」
「……じゃあ、なのはは答えられるの？」
ぴくり、と肩がふるえた。
無言になってしまったなのはに、ユーノは笑う。
「どうして、僕が好きなの？」
「……」
それは、考えて、考えて、どうしてもわからなかった答えだから。
卑怯だ、と思った。
自分ではわからない答えを、ユーノには求めるなんて。
わかっていたけれど、聞かずにいられなかった。
どうして？
だって———

「今まで、たくさん考えたよ。どうして僕はなのはが好きなんだろう。どうして僕は――――なのはのことだけ、こんなに欲しいって思うんだろう」

離さないように、離れないように、強く抱きしめる。
消えないように。
どこにも行ってしまわないように。

「でも、どうしても見つからない。だからね、たぶん……僕自身が、なのは自身が、答えなんだ」
「……どういうこと？」
「さあ、どうだろう。僕にも、よくわからない」
「なあに、それ」

思わず、なのははぷっと吹き出した。
いつも理路整然としているユーノが、「わからない」なんて。
だけどなぜだか、とてもうれしい言葉だった。
拗ねていた心が、いつのまにか素直になる。

「……私も、わからない。わからないままでも、だいじょうぶなのかな」
「だいじょうぶって？」
「……わからないままでも、ずっと、好きでいてくれる？」

理由があればいいのに、と、求めずにはいられないのは。
気持ちだけが見えて、それだけでは、変わってしまうことが怖くて。
理由がほしい。
そうしたら、なくしても、きっとまた見つけられる。
おずおずとユーノのほうにふりむいて、なのはは少しだけ困った

ように笑う。

「ずっと――――好きで、いられるかな」

「……それが、『聞きたいこと』？」

「……えへへ。うん」

なのはがてれたように微笑むと、ユーノもやわらかく微笑んだ。

なのはの好きな笑顔だった。

「――――好きでいたいな」

「……うれしい」

それは願いで。

それは祈りで。

それは――――探していた真実だから。

ぺろりと、唇を舐められる。

なんだか食べられた気分になって、なのはは真っ赤になった。

それでも、キスをねだるユーノに、なのはは目を閉じる。

目を閉じて、触れた唇から熱を感じる。

甘くて、とろけるようなキス。

なのはの大好きな、ユーノとのキス。

それは深みを増して、激しさを増して――――激しさ？

「んんっ」

なのはは、気づけばソファに押し倒されていた。

甘くて熱いキスに翻弄され、意識が働かなくなっていると、耳元でぽそりと囁かれる。

「――――」

かっと、なのははりんごのように頬を染めた。
顔を離して、ユーノはじっとなのはを見つめている。

（……うう、ずるい）

こんなとき、強引に攻めるでもなく、それ以上なにか言うわけでもなく。
ただ、なのはからの答えを待つなんて。
拒めば、きっとユーノは受け入れてくれるだろう。
いやがるなのはに無理矢理、などと、そんなことはしない。
信じているから、なのはにできることはひとつしかないのだ。

「……」

小さい声で返事をする。
聞こえなかったようで、ユーノは口元に耳を近づけた。
なのははぎゅうっと眼をつぶって、さらに小さい声でつぶやいた。

「……抱いて」

言葉だけじゃ足りない。
キスだけじゃ足りない。
「理由」がなくても、明日を信じられるように。
あなたがほしい。
全身で、心から、あなたを感じたいから。

———恋の色は何色だろう？
私はきっと、その答えを知っている。
きっとね、あなたと同じ色。

「ユーノくん。意地悪なところも、うそつきなところも、すぐにごめんって謝るところも、えっちなところも、自分勝手で、本当はすごくわがままなところも、全部、大好きよ」
「……それ、仕返し？」
「ちが――――きゃああっ」
「仕返し返し」
「し、仕返しだなんて言ってな――――んんっ」

そして、恋色に染まる。

恋色（後書き）

ちょっとエロかったですね。ユーノったら野獣！（笑）ま、たいしたことないんですけど。エロって難しいですよねー。かける人を尊敬する……。とりあえず、ユーノはなのはにメロメロってことで。はい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6647l/

月の羽根と星の祈り

2010年10月10日05時55分発行